375.9
Yo19
資料室

吉田彌平編

文國範師

第一部甲

二卷

東京
光風館藏版

42620
教科書文庫
4
810
51-1931
200030
1925

教科書文庫
4
810
51-1931
2000301925

資　料　室

375.9
Y019

文部省檢定濟
昭和六年二月四日　師範學校國語科教科用

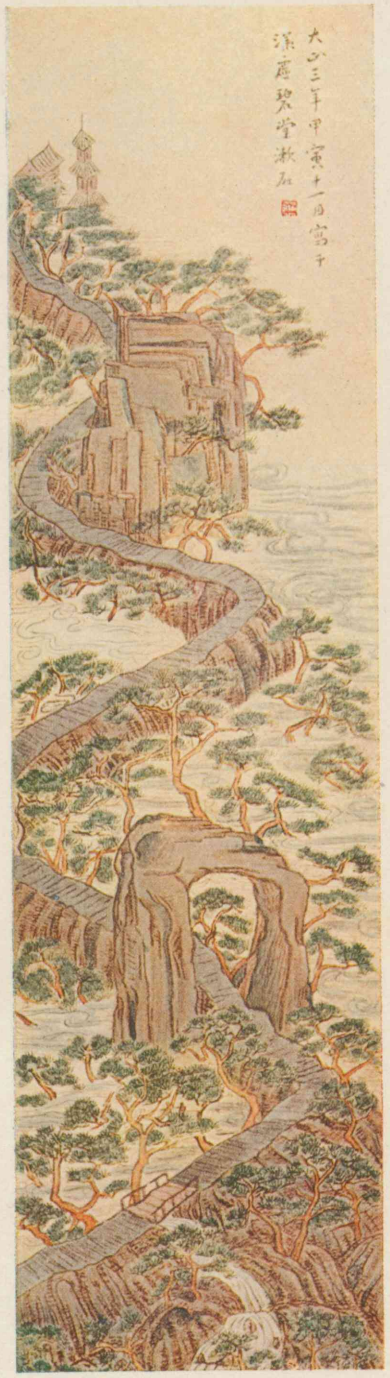
吉田彌平編

師範國文 第一部用

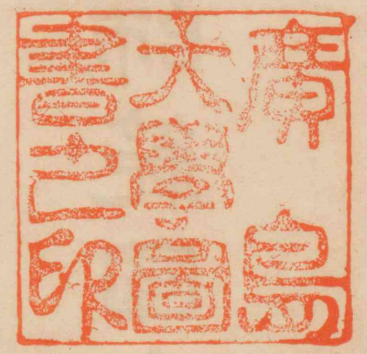
卷二

東京　光風館藏版

広島大学図書
2000301925



夏目漱石筆



師範國文 第一部用 卷二

目次

一 明治神宮……一　頁
二 事しあらば……一〇
三 佐久良東雄……一四　志賀直哉
四 鞍馬の火祭……二五
五 文鳥……夏目漱石　三三
六 漱石山房の秋……芥川龍之介　四一
七 秋風……正富汪洋　四七

八　雜草……阿部次郎　五四
九　鹽井川……十返舍一九　五九
一〇　形……菊池寛　六三
一一　ポチ……二葉亭四迷　六八
一二　二葉亭の文章……内田魯庵　八一
一三　利根川の秋曉……德富健次郎　八七
一四　月の洞庭湖……佐々木信綱　九〇
一五　佛法僧……高濱虛子　九四
一六　順禮唄……近松半二　一〇七
一七　繪はがきだより……永田秀次郎　一一四
天の川……一一四

ヴェニス……一一五
煤けぬ月……一一六
一八　トーチー……鈴木文史朗　一一七
一九　本居翁の遺蹟……芳賀矢一　一三一
二〇　おのが物まなび……本居宣長　一三八
二一　臨終の平田篤胤……五十嵐力　一四三
二二　冬の感情……室生犀星　一五四
二三　交友の道……松平樂翁　一五五
二四　杉浦重剛君を弔す……穗積陳重　一五七
二五　梅……藤岡作太郎　一六二
二六　春は來ぬ……島崎藤村　一六八

二七　岩倉右府……井上毅　一七一
二八　膽力……嘉納治五郎　一八四

廣島大學圖書之印

師範國文　第一部用　卷二

代々木の森
東京市の西郊代代幡町大字代々木にある森林

私
本文の作者溝口白羊

一　明治神宮

快美なる色彩の反射と和かい感觸とをもつた秋の陽光に包まれてゐる代々木の森。私はそれを仰ぎながら、そして何處からともなく高くにほつて來る新しい檜の香をかぎながら、幾度そこを通つたことであらう。森の中からは、時として、石を切るらしい金屬的の響や、木を削るらしい輕快な音が、快い調子を作つて流れて出た。

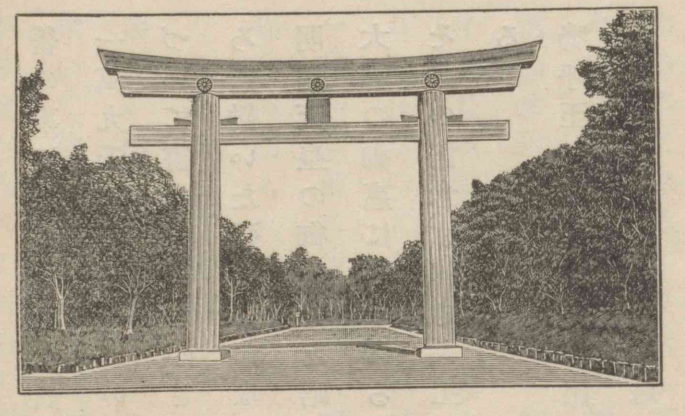
或時は、無數の蟻の集團が大きな餌を引くやうに、長さ六七丈も

ある獻木を牛車に載せて、多數の人夫が汗みどろになりながら、えい〳〵聲して森の中へ引入れるのを見たこともあつた。

あの中に明治神宮が建つのだと、さう思ふと、私の心は莊嚴な或刺戟を感ずると同時に、何とも言へない強い懷かしさが充溢した。そして毎日のやうに其處を通る度に、工程が目に見えて段段捗つて、基礎工事が終り、小屋組が出來て、殿舍の形の次第に整つて行くのが、たまらない程嬉しく思はれた。

其の明治神宮がたうとう竣工を告げた。

かつて赤土の露出して居る上に、鋭く尖つた切石が幾つもならんで、烈しい日に光つて居るのを見た處には、今清々しい色の小砂利を敷きつめた參道の白い線が、常綠の森の中に長く續き、その以前、疎らな松林の中から耕地の廣く展開して居るのが見渡



明治神宮大鳥居

された御料地は、いつの間にやらすつかり見ちがへる程美しい景色になつて、森嚴と幽邃との趣を兼備へた鬱蒼たる密林の中から謂はゆる流造素木の神殿の見えつ隱れつしてゐるのが、何とも言へない神々しい感じを起させる。

神域。眞に神のいまし給ふに適した莊嚴と靜寂と幽雅との領土。私ははじめて完成した明治神宮の神苑に立つたとき、今更のやうに、其の改つた光景を見て强烈な感激に打たれた。何者の力が此の新しい建設の事業を完成させたので

六年四月の和

あらう。造營局の記錄の上には、大正四年四月起工以來、直接造營の事に當つた延人員が百數十萬人であり、用材の總計が尺〆一萬九千本であるといふやうなことが、細密な數字的計算に基づいて書いてあるが、さういふ數字を高く超越して隱れたところに働いた強い力がなければならぬ。

明治天皇の御聖德と昭憲皇太后の御懿德と、そして此の二柱の大神の御惠に對へ奉る國民の感謝の至情と、此の三つのものこそ此の記念すべき大工事を完成するに至らしめた原動力である。

嗚呼、至純な動機から出た青年團の造營奉仕、百里二百里の遠方から眞心をこめて輸送した無數の獻木。それらは何事を語つて居るか。實に此の神宮の御苑を形成する一株の樹木、神殿を

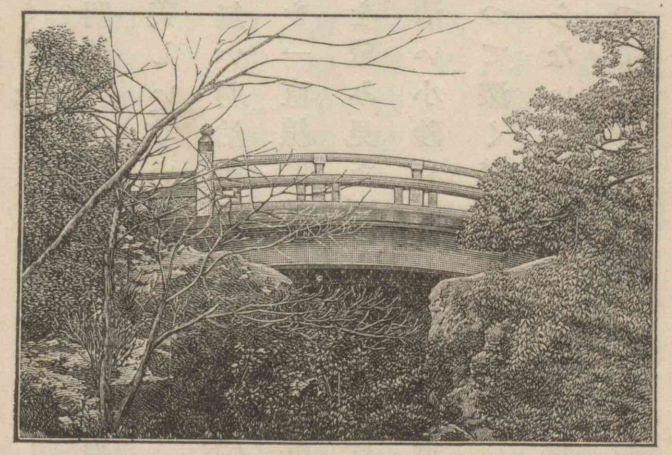
組織する一本の柱にも、悉く國民の燃えるやうな熱誠が籠つてゐるのである。かくして、殆ど全く國民の誠意を以て完成したその宮居に、國民崇敬の標的たる明治天皇昭憲皇太后の御靈が宿らせ給ふのである。何といふ美しい、尊い事實であらう。

今までの神社に曾て見たことの無い明治神宮の特色は實にここに在るのである。私は表參道を一直線に進んで神宮橋畔第一鳥居の前に來て遠く神域の中を望み見た刹那に、第一に此の事を直感した。そして一歩々々、清い小砂利の上を、神殿に近づくに隨つて、愈〻肅然たる心持になつて、深く襟を搔合はせた。

參道の兩側には盡きることを知らない密林がどこまでも長く續いて、往くに隨つて段々濃くなつてゐる。鳥居から約一町ばかり奥へ入つて神橋の處へ來ると、何處からともなく清冽な水

の落ちる音が聞えて來る。花崗石の勾欄に凭つて下を見ると、溪流の趣を成した風致の好い細流の兩岸、自然石の配置された處に數十株の楓がその影をせゝらぎの水の面に落してゐる。此處は神苑の中で唯一の人工を加へた處で、神苑の殆ど總べてが纖細な技巧を排した自然的の大觀を呈してゐる中に、特殊の庭園趣味を發揮してゐる。

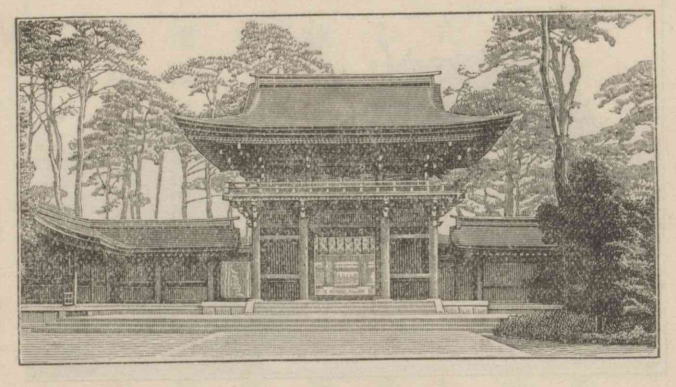
神橋を渡ると兩側は一帶の杉並木になつてゐて、その左側の並木が斷えた處に千七百四十の樹



明治神宮神橋

原宿
東京府豐多摩郡
千駄ヶ谷町原宿
千駄ヶ谷
同千駄ヶ谷

齡を重ねたといはれる直立六丈餘の臺灣產檜の古木で造られた大鳥居がある。明神鳥居として實に日本第一のもので、高さは三丈九尺に達するとの事だ。



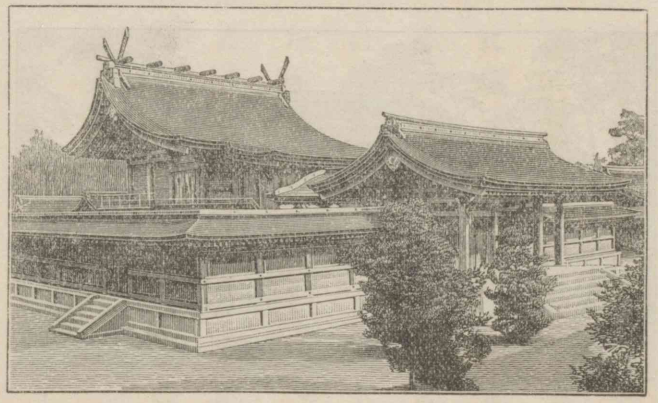
明治神宮楼門

此の鳥居の在る處は南方原宿方面からする幅員八間の南參道と、北方千駄ヶ谷から來て居る幅員六間の北參道との接合點で、此處から左折すれば、道は更に十間の幅員に擴大されて西を指すこと百五十間、その道の盡きた處で、右を見るとぱつと眼界は廣く且明るくなつて、約一町の北方に亭々として高く聳

士佐繪
中古の藤原基光同隆能を祖とする一派の歴史畫

えた松の疎林を背景にした土佐繪のやうな神殿の檜皮葺を拜することが出來る。

御社殿は樓門・拜殿・本殿等の建造物を合はせて、其の總坪數六百五十坪。本殿は全部木曾御料林產の檜材を以て造られてある。近く拜殿にのぼつて拜すると、芳しい檜の香氣が強く鼻を撲つて、如何にも神の新しい宮居らしい一種の崇高な感じに打たれる。拜殿から中門を通して奥は卽ち神靈のおはします內々院で、衆庶の漫に窺ふことを許されない神聖の場所である。



明治神宮本殿

何事の
西行法師が伊勢神宮に參拜したときに詠んだ歌

何事のおはしますかは知らねどもかたじけなさに涙こぼるゝ

私は默禱を終へて、始めて向ふを見上げた。

まあ、何といふ明るい、快い感じを持つた社殿だらう。今まで見た大抵の社殿が、皆暗い周圍から來る鈍い光波の中に、靜寂な、併し陰鬱な感じを漂はせて居る中に、此の神宮ばかりは隱す所の無い心持で、十分な光線に總べてを解放し、總べてを展開して見せてゐる。而もそれでゐて、決して淺露な感じはせずに却て一層深く大きくされた靜寂の中から、譬へやうもない莊嚴な感じが滲透して來て、自然と頭を下げさせるやうな强い威力が迫り寄るのを覺えるのだ。

これでこそ明治天皇の神靈を奉祀した宮居といふことが出來

ると、私はさう思つた。久しく宮廷に蟠つてゐた一切の舊弊を排除して國民と近く觸接し、國民と親しく協力して新文明を吸收しようと御勉め遊ばされた明治天皇の活動的進取的の濶達な御氣象に對して、如何にもその明るいお宮の感じが、ぴつたりと呼吸を合はせてゐるやうに思はれる。（明治神宮記に據る）

佐久良東雄
勤王家
常陸の人
櫻田の變に坐して萬延元年（一八六〇）牢死
年五十

二　事しあらば

佐久良東雄

事しあらばわが大君の大みため人もかくこそ散るべかりけれ（落花を見て）

おきふしも寢ても覺めても思ひなばたてし心のとほらざらめや

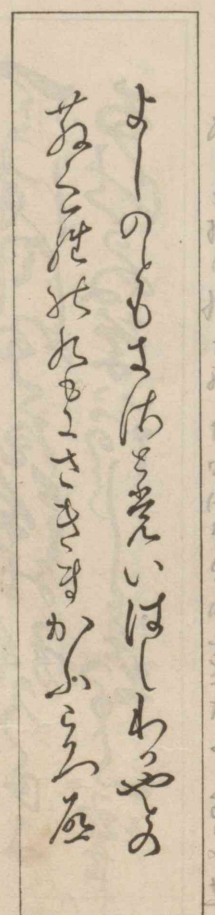
伴林光平
勤王家
河内の人
五條の天誅組に加り元治元年（一八六四）刑死
年五十二

筆蹟
よしのともきさともいはじわがやどのさくらのくもにさきまがふころ　啓

佐久間象山
幕末の先覺
信濃松代藩士
元治元年（一八六四）横死
年五十四

ますらをの屍くさむす荒野らに咲きこそ匂へ大和なでしこ　伴林光平

度會の宮路に立てる五百枝杉かげ踏むほどは神代なりけり　佐久間象山



佐久間象山筆蹟

梓弓眞弓槻弓さはにあれどこの筒弓にしくものあらめや（銃砲）　佐久間象山

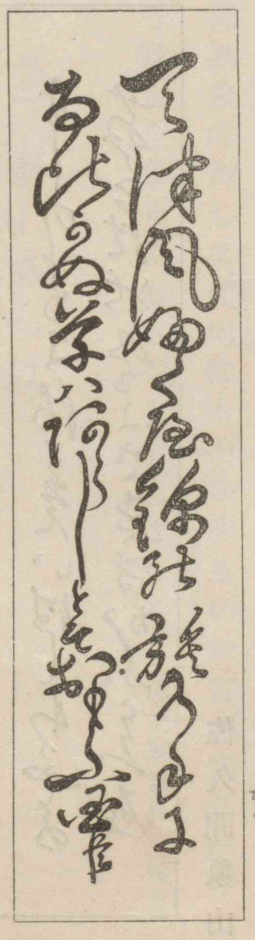
みちのくのそとなる蝦夷のそとを漕ぐ船より遠くもの

久坂義助
勤王家
長州藩士
元治元年(一五三四)
戰死
年二十六
筆蹟
天津風ふくや錦の旗の手になびかぬ草はあらじとぞおもふ
國臣

平野國臣
勤王家
福岡藩士
元治元年(一五三四)
刑死
年三十七

をこそおもへ
いくたびもくりかへしつゝわが君のみことしよめば涙

久坂義助



平野國臣筆蹟

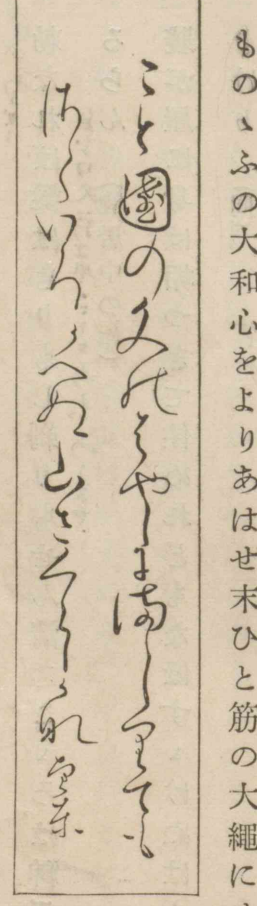
こぼるもの
ものゝふの臣の男の子はかゝる世になに床の上に老いはてぬべき

平野國臣

わが心岩木と人やおもふらん世のためすてしあたら妻子を
かずならぬ草の下葉の露の身も死なばや死なん大君のへに

野村望東尼

ものゝふの大和心をよりあはせ末ひと筋の大縄にせよ



望東尼筆蹟

平らけき道うしなへる世の中をゆりあらためん天地のわざ
(安政大地震の折)

三條實美

大君はいかにいますと仰ぎ見れば高天の原ぞ霞みこめ

野村望東尼
勤王家
福岡藩士野村貞貫の妻もと
慶應三年(一五三七)
歿
年六十二
筆蹟
こと國の文のはやしにまじりてもさくいろかへぬ山ざくらかな
望東

三條實美
舊公卿
太政大臣
公爵
明治二十四年薨
年五十五

たる（筑紫にさすらへし程の歌の中に）

萬世の名こそ惜しけれうつせみの世の人言はさもあらばあれ（同）

岩倉具視

勅なれば髪はきりもし剃りもせん清きこゝろは神ぞ知るらん（籠居中の作）

賤が屋に身は垢つきて住めれどもなほすゝけぬは心なりけり（同）

三　佐久良東雄　薔園

我が國の花には美はしいのが澤山あるが、中にも花の中の花として世の人にもてはやされるのは、やはり櫻の花である。その

岩倉具視（文化八年）
舊公卿
右大臣
公爵
明治十六年薨
年五十九
正一位

櫻の花を愛して、自分の苗字にした人がある。それは今から七十年程前に國事に斃れた佐久良東雄といふ志士である。

この人は東京の東北、二十里ばかり有名な霞浦に臨んだ土浦の町つゞき、眞鍋町の善應寺といふ寺に居た、もとは良哉といふ坊さんであつた。良哉は文化八年に土浦から北へ五里、筑波山の東に當る柿岡町の在、浦須村の農家に生まれた。九つの時から隣の下林村觀音寺の住持康哉の弟子になつて、良哉といふ名をもらつた。老僧康哉は常に心を皇室に傾けて居た人で、又萬葉集の歌が好きなところから、釋契沖の人となりを慕つて居た。世間では康哉を萬葉法師と呼んだ。小僧の良哉も見やう見まねで、十四の年に、

いくつねて春はくるやと父母に問ひし昔もありにしも

文化八年
光格天皇の御代
將軍德川家齊の時（一八〇四）
土浦
眞鍋
柿岡
何れも今の茨城縣新治郡の町
浦須村
下林村
共に今の同郡林村の內
釋契沖
大阪の學僧
萬葉集を研究して代匠記を著した
元祿十四年（一六〇一）寂
年六十二

のを

などと詠んだ。いつしか萬葉が好きになり、師匠を喪つてからも始終歌を詠んだり、又古い歌や歴史を調べたりして居た。一體日本の國柄は、調べれば調べるほど外國と違つて居る點が著しくなつて來る。良哉も古い歌をしらべ、古い歴史をしらべて、深く悟るところがあつた。日本の國の有難い謂はれ、又皇室の貴いことをしみ〴〵味はひ知つた。「どうかして幕府を倒し、上御一人の大御心をお安め申上げよう。それには先づ何とかして京都へ上りたい。京都には陛下が入らせられる。早く京都へ上りたい。」と、明けくれ思つてゐた。この頃は徳川幕府もも う末で、世の中が何となく穏かならぬ時であつた。

二十五の年に善應寺の住職になつた。その翌年は凶作であつ

土屋侯
土浦藩主土屋寅直

藤田東湖
勤王家
名は彪
虎之助後に誠之進と稱す
安政二年(一八五五)大地震に卒す
年五十

たので、良哉は自分の貯はもとより、長持に二棹あつた藏書を皆賣拂つて困窮な人に施した。で、藩主の土屋侯から厚く賞せられたといふ事もあつた。

寺の後の小高い丘は、富士と筑波を左右に眺め、霞浦をすぐ脚下に見下す風景のよい處であつた。それゆゑ土屋侯を始め當時の名士がよく遊びに來られた。中には國事について祕密に相談をするものもあつた。水戸の藤田東湖などもその一人であつた。しかし良哉は農事の忙しい時には戸を立て切つて、どんな人が見えても上にあげなかつた。そして「あんなに農民が汗水を流して働いてくれるのを高みで見物するには忍びない。たつて見たければその處へいつて見るがいゝ。」といつた。

良哉は多くの學者や名士と親しくなるにつけて追々自分とい

或日　天保十四年（一八四三）良哉が三十九の時

ふものを見つめる樣になつた。そして何だか自分の境遇に不安が起つた。今日の時世は、こんな事のして居られる時ではないと、つく〳〵考へる樣になつた。

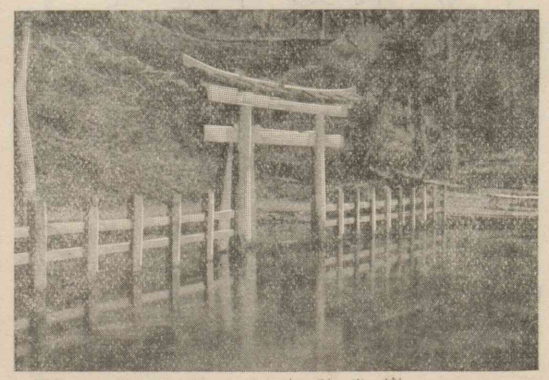
或日の事、良哉は町中へふれた。「明日はお寺で不思議な事があるから、見に來るがいゝ。」これを聞いた町の人は皆、何があるのか知らんと、朝早くから誘ひ合つて寺へ來た。來て見ると驚いた、寺の庭の眞中で、住職は寺男に薪を山のやうに積ませてそれをもやしてゐる。その四方には竹をたてゝ注連繩が張つてある。よく見ると、何も煮るのでなし、湯を沸かすのでもないらしい。町の人は何事だらうと不思議に思つて見て居た。やがて住職は「皆の衆、御苦勞でござつた。拙僧は今日から坊主をやめて、御國の爲に盡くさうと思ふのぢや。」といつて、お經を一遍讀む

色川三中　國學者　通稱三郎兵衞　安政二年（一八五五）歿　年五十四

鹿島神宮　茨城縣常陸國鹿島郡鹿島町にある　今官幣大社

や否や自分の着てゐた袈裟・衣を脱ぎすてゝ、いきなり炎々と燃え上つてゐる焰の中へ投入れた。村人はあれよ〳〵と驚いてゐる間に、袈裟も衣もめろ〳〵と燃えてしまつた。良哉は、そのまゝ裸體で寺から駈下りて町へ出た。そして、一目散に土浦の色川三中の宅へいつて新しい衣裳をもらつて着用し、汚れた身を清めるといふので、霞浦を船で渡つて、鹿島神宮に詣つた。

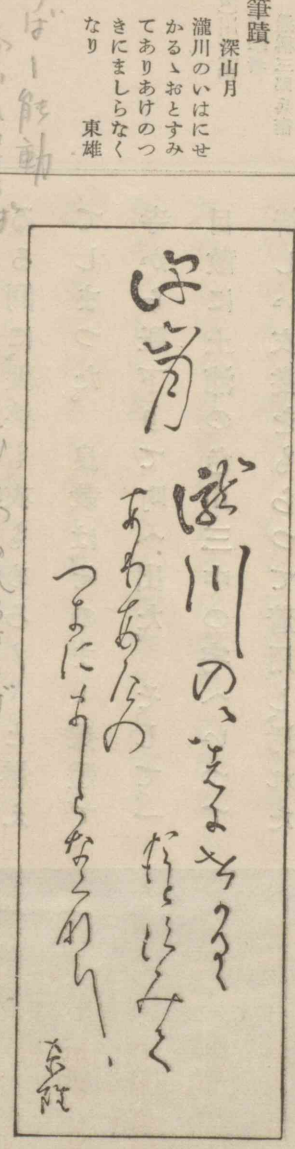
鹿島神宮には有名な御手洗（みたらし）の池といふ清い冷い泉がある。其處に七日間水垢離をして、身をも心をも洗ひ清め、やつと安心して、拜殿のはるか下の方に荒薦を敷い



鹿島神宮御手洗池

て、神前に祝詞をあげた。この時、自分はもう僧侶ではない、氏名を改めねばならぬといふので、かねゞゝ好きな櫻を苗字にして、名は東雄とつけた。そして神德を謝する爲に同社の境内に櫻を千本植ゑた。今でも東雄櫻といつて殘つてゐる。

東雄は平素大君のおはします京の地を慕ひ、たとひ飴賣になつても京に住まへれば本望だ。」と口ぐせのやうにいつて居たが、弘化二年、年月あこがれてゐた京都へ上ることになつた。その時



佐久良東雄筆蹟

筆蹟
深山月
瀧川のいはにせかるゝおとすみてありあけのつきにましらなくなり　東雄

弘化二年　仁孝天皇の御世　將軍家慶の時（一八〇五）

の歌に、

一歩み歩めば歩むたびごとに都へ近くなるが嬉しき

さて京都に着いて、

現神わが大君のおはします都の土はふむもかしこし

又將軍の居城たる江戸城の立派さに引きくらべて、京都の御所の粗末なのを憤慨して、

今に見よ高天の原に千木高知り瑞のみあらかつかへまつらん

それから數年の間、色々と國事に就いて力を盡くした。その國を思ふ心がなみ〳〵でない上に、古歌や歴史に詳しく、歌も上手に詠むので、佐久良東雄の名は、志士の間に誰知らぬものもなかつた。

井伊大老
彦根藩主名は直弼
掃部頭
萬延元年(一三三〇)卒年四十六
浪士
高橋多一郎と其の子莊左衞門
唐丸籠
平民で重罪を犯したものを護送するときに用ひる駕籠
唐丸はシヤモの一種で大きくて鬪に強いこれを飼ふ籠に似て居る故の名
まつろはぬ
江戸城炎上の事をきいて詠んだ歌

處が突然東雄は幕吏に捕へられて、牢に入れられる事になつた。時に萬延元年春三月、桃の節供の三日の日、珍しく大雪がふつた時、江戸城は櫻田門外で井伊大老が水戸の浪士に刺殺された。當時東雄は大阪に居て直接の關係はなかつたが、その浪士を二人かくまつてやつたといふので罪になり、遂に大阪で召捕られて江戸へ送られた。

唐丸籠といふ窮屈な駕籠に押込められて、東海道五十三次を下つて來た。すると志士ぢや、歌人ぢや、佐久良東雄が通るぞといふので、途々の宿屋などでは、駕籠の傍へ短冊などをもつて來ては何か一筆とたのむ。東雄は、よし〳〵といつては、歌をかいてやつた。それらの歌の中に、こんなものもあつた。

まつろはぬ奴ことく〳〵東の間にやきほろぼさん天の火

傳馬町
今日本橋區のうち

もがも
うつせみの人なる我や鳥けもの草木と共に朽ちはつべしや

君がため命死ぬべき大丈夫となりてぞ生けるしるしありける

又今樣歌もある。

このおほいなる天地の中にちひさく生まれいで、千年に殘る名もなくて、消えゆく人こそはかなけれ。

さて江戸で傳馬町の牢屋に籠められたが、東雄は幕府から惡まれて居るので、毒害されるかも知れない、死ぬのは固より覺悟して居るが、そんな死に樣をするのは殘念だと思つた。それで食物のかはりに枇杷をくれと牢番に賴んで、毎日々々枇杷の實だ

伯夷叔齊　支那の古代の高士　周の武王が殷の紂王を伐つて天下を取つたので周の粟を食むのはいさぎよくないといつて首陽山に隱棲して薇を採つて食つて居た

水戸侯　德川慶篤

千住　今の東京府北豐島郡南千住町東京市の東北郊

け食べて居た。かの伯夷・叔齊が首陽山の薇を食べたやうに、幕府のものはたべぬといふ心意氣もあつたのである。そのうちに到頭食を絶つて死んでしまつた。年は五十であつた。

其の後十年とたゝないうちに、東雄はじめ勤王諸士の心血を注いだ結果として、王政復古の大業は成就されて、めでたき明治の大御代となつた。その明治元年の十二月に、水戸侯が金を東雄の遺族に贈つて千住の小塚原から大阪の夕陽が丘に改葬させられた。明治二十四年には靖國神社に合祀せられ、三十一年には、忝くも從四位を贈られた。聖恩枯骨に及ぶといふべきである。

朝日かげ豐さかのぼる日の本のやまとの國の春のあけぼの

鞍馬　京都府愛宕郡鞍馬村　山中に鞍馬寺といふ天台宗の古寺がある

志賀直哉　文學者　明治十六年宮城縣石卷町生

といふ東雄の歌は、大日本帝國の今日あることを早くも豫言したやうに思はれる。

佐久良東雄は櫻咲く日本の國の男子の中の男子である。

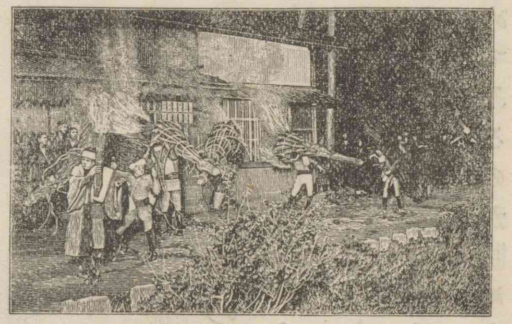
（和歌百話に據る）

四　鞍馬の火祭

志賀直哉

十月二十日過、私は二三人の友と鞍馬へ火祭といふのを見にいつた。暮方に京都を出て、北へ〳〵と爪先登りの道を三里程行くと、遠くの山の峽がほんのり明るく、その邊一帶淡く煙の立籠めてゐるのが眺められた。苔の香を嗅ぎながら、冷え〴〵とした山氣を浴びて行くと、この奥にさういふ夜の祭があることが不思議に感ぜられた。子供づれ・大人づれの見物人が、提燈をさ

げて行く。それを、自動車が、時々前の森や山の根に強い光を射つけながら追ひぬいて行く。山からは、五位鷺が啼きながら飛んで來る。そして行くほどに、幽かな、くすぶりくさい匂がして來た。



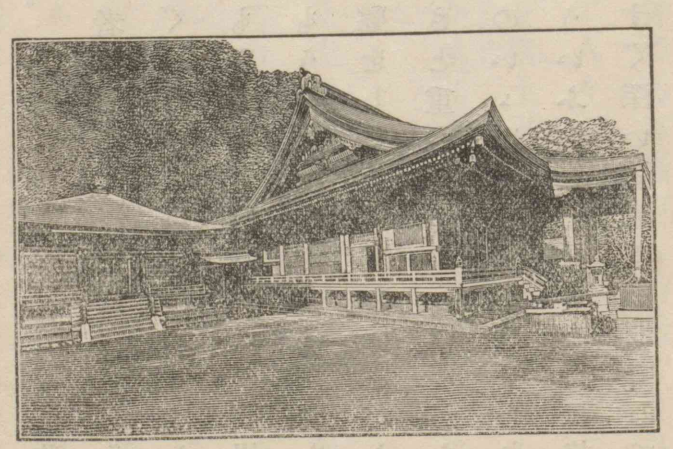
焚火の里

里では家ごと軒先に、といつても通りが狹いので、道の眞中を、一列に焚火が並んでゐた。大きな木の根や人の脊丈ほどある木切れで三方から圍ひ、その中に燃えてゐるのが、何か岩間の火を見るやうな一種の感じを起させた。

焚火の里を出ぬけると、稍〻廣い場所に出た。幅の廣い石段があつて、その上に丹塗の大きな門があつた。廣場の兩側は一杯の

見物人で、その中を下帶一つに肩だけちよつとしたものを着て、手甲・脚絆・草鞋がけに身を固めた向ふ鉢卷の若者たちが、柴を束ねた藤蔓で卷いた大きな松明を擔いで、「最澄祭禮」――これは本當ではないが、ちよつとさう聞きなされる掛聲をしながら、兩足を踏張り、右へ左へよろけつゝ、上手に中心を取つて歩いてゐる。或者はよろける風をして、わざと群集の前へ火を突きつけた。或者は家の軒下にそれを擔ぎこんだ。火の燃え方が弱くなり、自分の肩

最澄
高僧
天台宗延暦寺の開祖
勅諡傳教大師
弘仁十三年（八二二）寂
年五十六



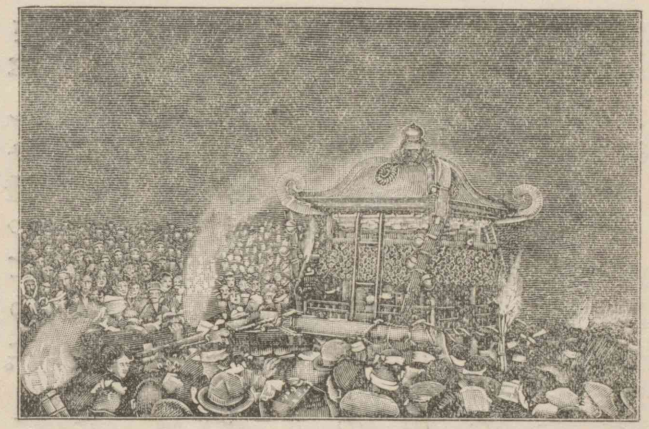
鞍馬寺本堂

も苦しくなると、一抱ほどあるその松明を不意に肩から外し、どさりと勢よく地面へ投げおろす。同時に藤蔓がはじけて柴は開き、火は非常な勢で燃上る。若者はしばし汗を拭き、息を入れるが、やがて又別の肩にそれを擔ぐ。それも自分一人ではとても上げられず、傍の人から助けてもらふのである。この廣場を拔け、先の通りへ入ると、そこにはもう焚火はなく、今の松明を擔いだ連中が「最澄祭禮」と聞える掛聲をして、狹い處を往きかふ。子供は年相當な小さい松明を、わざと重さうに、よろけながら擔ぎ廻る。里全體が淡く煙り、氣持のいゝぬくもりが感ぜられる。星の多い澄渡つた秋空の下で、かういふ火祭を見る心持は格別だつた。一筋の低い軒並の裏はすぐ深い溪流になつてゐて、そして他方はまた高い山になつてゐるといふやうな處では、いく

ら賑はつてゐるといつても、その賑かさの中には、山の夜の靜けさがしみ透つてゐた。これが都會のあの騷がしい祭より外知らぬ者には大變よかつた。そして、人々も一體に眞面目だつた。「最澄祭禮」、この掛聲の外には大聲を出す者もなく、酒に醉ひしれた者も見かけられなかつた。しかも、それはすべて男だけの祭である。

或家で、裸體の男が軒下の小さな急流に坐つて眼を閉ぢ、手を合はせ、長いこと何かロの中で唱へてゐた。清いつめたさうな水が乳のあたりを波打ちながら流れてゐた。大きな定紋のついた、變に暗い提燈を持つた女の兒と、無地の麻帷子を展げて持つた女とが軒下に立つて、その男のあがるのを待つてゐた。漸く唱言を終へると、男は立つて、流の端に揃へてあつた下駄を穿い

た。帷子を持つた女は、濡れた體に默つてそれを着せかけた。男は提燈を持たず、下駄を曳きずつて、すぐ暗い土間の中へはひつて行つた。これは、これから神輿を擔ぎに出る男だといふ。



鞍馬の神輿

かういふ連中が、間もなく廣場の石段下に大勢集つた。そこには二本の太い竹に高く注連繩が張渡してあつて、その注連繩を松明の火で燒切つてからでなければ、誰もその石段を登ることが出來ないとのことだ。しかし繩は三間以上も高いところにあつて、松明を立てゝ

も、その火はなか〳〵そこまでは屆きさうにない。澤山の松明がその下に集められる。その邊一帶、火事の時のやうに明るく、一刻も早くそれの燒切れるのを仰向いて望んでゐる群集の顏を赤く照らし出してゐた。

やがて火が漸く移り、繩が火の粉を散らしながら二つに分れ落ちると、拔刀を振翳した男が、非常な勢で眞先に石段を駈登つて行つた。群集は叫び聲をあげながら、すぐそれに續いた。しかし、山の門にもう一つ、それは低く、ちやうど人の丈よりちよつと高いくらゐに第二の注連繩が張つてある。先に立つた拔刀の男は、それを振翳したまゝ駈拔ける。注連繩は二つに切れる。そして群集は坂路を奧の院までそのまゝ駈登るのである。私は友を顧みて言つた。

お旅　祭禮の時神輿が渡御あつて假に鎭座する處

「どうだい、もう歸らうか。」

「お旅でやるお神樂を見て行かうよ。」

神樂といふのは、四五人で擔ぐくらゐの大きな松明をいくつか、神樂の囃子に合せて、神輿のまはりを擔ぎ廻るのである。

「大概もうわかつたぢやないか。」

「何時だ。二時半か。」

時計を見ながら友がいつた。

「これで京都へ歸ると、ちやうど夜が明けるかも知れませんよ。」

と、もう一人の友がいつた。

焚火の町では、來る時岩間の火のやうに見えてゐたのが、今は盛に燃えてゐた。里を出ると、急に山らしい冷氣が感ぜられた。

私たちは時々振返つて、明るい山の峽を見た。道は往きより近く思はれ、下りで樂でもあつたがやはり皆は段々疲れて、無口になつた。

叡山　比叡山

夏目漱石　英文學者　小說家　名は金之助　江戸生　大正五年歿　年五十

「睡くてかなはん。」

と一人がいつた。

「僕が腕を組んで歩いて上げるから、眠りながら歩き給へ。」

もう一人がさういつて、二人腕を組んで歩いた。

京都へ入る頃は、實際友がいつたやうに、叡山の後から夜がしらじらと明けて來た。（暗夜行路）

五　文鳥

夏目漱石

文鳥の眼は眞黑である。瞼の周圍（まはり）に細い淡紅（うすべに）色の絹絲を縫附けたやうな筋がはひつてゐる。眼をぱちつかせる度に、絹絲が

急に寄つて一本になる。と思ふと、又圓くなる。籠を箱から出すや否や、文鳥は白い首をちよつと傾けながら、此の黑い眼を移して、始めて自分の顏を見た。さうして、ちゝと鳴いた。

自分は靜かに鳥籠を箱の上に据ゑた。文鳥はぱつと留り木を離れた。さうして又留り木に乘つた。留り木は二本ある。黑みがかつた靑軸を程よき距離に橋と渡して横に並べた。其の一本を輕く踏まへた足を見ると、如何にも華奢に出來てゐる。細長い薄紅の端に眞珠を削つた樣な爪が着いて、手頃な留り木をうまく抱へ込んでゐる。すると、ひらりと眼先が動いた。文鳥は既に留り木の上で方向を換へてゐた。しきりに首を左右に傾ける。傾けかけた首をふと持直して、心持前へ伸したかと思つたら、白い羽根が又ちらりと動いた。文鳥の足は向ふの留

三重吉
文學者
鈴木氏
漱石の門人
明治十五年廣島縣生

り木の眞中あたりに工合よく落ちた。ちゝと鳴く。さうして遠くから自分の顏を覗き込んだ。

自分は顏を洗ひに風呂場へ行つた。歸りに臺所へ廻つて、戶棚をあけて、昨夕三重吉の買つて來てくれた粟の袋を出して、餌壺の中へ餌を入れて、もう一つには水を一杯入れて、書齋の緣側へ出た。

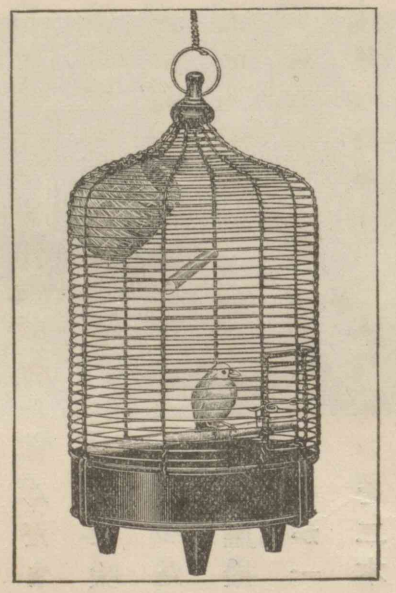
三重吉は用意周到な男で、昨夕丁寧に餌をやる時の心得を說明していつた。其の說によると、無闇に籠の戶をあけると、文鳥は逃げ出してしまふ。だから、右の手で籠の戶をあけながら、左の手を其の下へあてがつて、外から出口を塞ぐやうにしなくては危險だ。餌壺を出す時も同じ心得でやらなければならないと、その手つきまでして見せたが、かう兩方の手を使つて、餌壺をど

うして籠の中へ入れる事が出來るのか、つい聞いておかなかつた。

自分は已むを得ず、餌壺を持つたまゝ、手の甲で籠の戸をそろりと上に押上げた。同時に左の手で開いた口をすぐ塞いだ。鳥はちよつと振返つた。さうして、ちゝと鳴いた。自分は出口を塞いだ左の手の處置に窮した。人の隙を窺つて逃げるやうな鳥とも見えないので、何となく氣の毒になつた。三重吉はわるい事を教へた。

大きな手をそろ〳〵籠の中へ入れた。すると、文鳥は急に羽ばたきを始めた。細く削つた竹の目から、暖かいむく毛が白く飛ぶほどに翼を鳴らした。自分は急に自分の大きな手が厭になつた。粟の壺と水の壺とを留り木の間に漸く置くや否や、手を

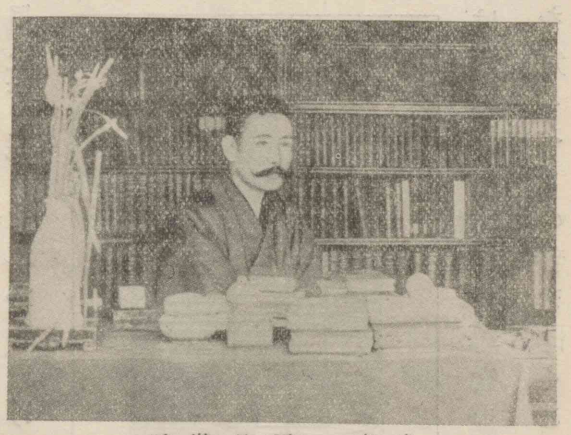
引込ませた。籠の戸はぱたりと自然に落ちた。文鳥は留り木の上に戻つた。白い首を半ば横に向けて、籠の外にゐる自分を見上げた。それから、曲げた首を眞直にして、足の下にある粟と水とを眺めた。自分は食事をしに茶の間へ行つた。



文鳥

其の頃は、日課として小説を書いてゐる時分であつた。飯と飯との間は大抵机に向つて筆を握つてゐた。靜かな時は自分で紙の上を走るペンの音を聞くことが出來た。伽藍のやうな書齋へは、誰も這入つて來ない習慣であつた。筆の音に寂しさといふ意

味を感じた朝も晝も晩もあつた。併し、時々は此の筆の音がぴたりと止む、又止めねばならぬ折もあつた。其の時は指の股に筆を挾んだまゝ、手の平へ顎を載せて、硝子越に吹荒れた庭を眺めるのが癖であつた。それが濟むと、載せた顎を一應撮んで見る。それでも筆と紙とが一緒にならない時は、撮んだ顎を二本の指で伸して見る。すると緣側で文鳥が忽ち千代々々と二聲鳴いた。



書齋の夏目漱石

筆を閣いて、そつと出て見ると、文鳥は自分の方を向いたまゝ、留

り木の上から、のめりさうに白い胸を突出して、高く千代といつた。三重吉が聞いたら嘸喜ぶだらうと思ふ程ない〻聲で千代といつた。三重吉は、「今に馴れると千代と鳴きますよ、きつと鳴きますよ。」と受合つて歸つて行つたが、成程その言ふ通りであつた。

自分は又籠の傍へしやがんだ。文鳥は膨らんだ首を二三度縱横に向け直した。やがて一かたまりの白いからだがぽいと留り木の上を拔け出した。と思ふと、綺麗な足の爪が半分ほど餌壺の緣から後へ出た。小指を懸けてもすぐ引繰返りさうな餌壺は、釣鐘のやうに靜かである。流石に文鳥は輕いものだ。何だか淡雪の精のやうな氣がした。

文鳥は、つと嘴を餌壺の眞中に落した。さうして二三度左右に

振つた。綺麗にならして入れてあつた粟が、はら〳〵と籠の底に零れた。文鳥は嘴を上げた。咽喉のところで微かな音がする。又嘴を粟の眞中に落す。又微かな音がする。その音が面白い。靜かに聞いてゐると、圓くて、細やかで、しかも非常に速かである。堇ほどな小さい人が、黃金の槌で瑪瑙の碁石でもつゞけざまに敲いてゐるやうな氣がする。

嘴の色を見ると、紫を薄くまぜた紅のやうである。其の紅が次第に流れて、粟をつゝく口先のあたりは白い。象牙を半透明にした白さである。此の嘴が粟の中へはひる時は非常に早い。左右に振りまく粟の珠も非常に輕さうだ。文鳥は身を逆さまにしないばかりに、尖つた嘴を黃いろい粒の中にさしこんでは、膨らんだ首を惜氣もなく右左へ振る。籠の底に飛び散る粟の數は幾粒だか分らない。それでも餌壺だけは寂然として靜かである、重いものである。餌壺の直徑は一寸五分ほどだと思ふ。自分はそつと書齋へ歸つて、寂しくペンを紙の上に走らしてゐた。緣側では文鳥がちゝと鳴く。折々は千代々々とも鳴く。外では木枯が吹いてゐる。（漱石全集—文鳥）

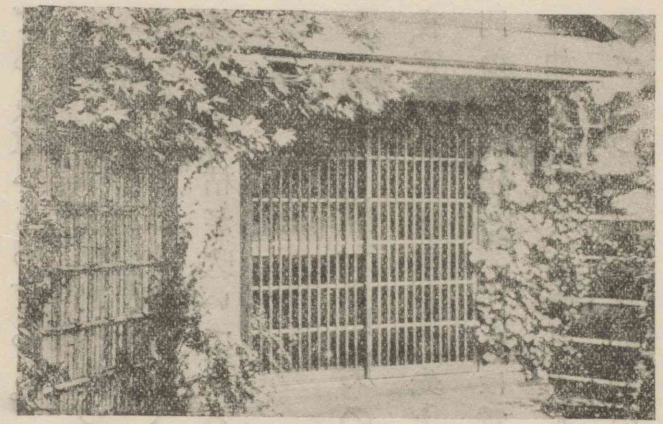
漱石山房
東京市牛込區早稻田南町夏目漱石の住居
芥川龍之介
文學者
東京生
昭和二年歿
年三十六

六　漱石山房の秋

芥川龍之介

夜寒の細い往來を爪先上りに上つて行くと、古ぼけた板屋根の門の前へ出る。門には電燈がともつてゐるが柱に掲げた標札の如きは、殆ど有無さへも判然しない。門をくゞると砂利が敷いてあつて、その又砂利の上には庭樹の落葉が紛々として亂れてゐる。

砂利を踏んで玄關へ來ると、これも亦古ぼけた格子戸の外は、壁といはず壁板といはず悉く蔦に蔽はれてゐる。だから案内を請はうと思つたら、まづその蔦の枯葉をがさつかせて、呼鈴の鈕を探さねばならぬ。それでやつと呼鈴を押すと、明りのさしてゐる障子が開いて、束髪に結つた女中が一人、すぐに格子戸の掛け金を外してくれる。玄關の東側には廊下があり、その廊下の欄干の外には、冬を知らない木賊の色が一面に庭を埋めてゐるが、客間の硝子戸を洩れる電燈の光



漱石山房の玄關

も、今は其處までは照らしてゐない。いやその光がさしてゐるだけに、向ふの軒先に吊した風鐸の影も、反つて濃くなつた宵闇の中に隱されてゐる位である。

硝子戸から客間を覗いて見ると、雨漏りの痕と鼠の食つた穴とが、白い紙張りの天井に斑々とまだ殘つてゐる。が、十疊の座敷には、赤い五羽鶴の毯が敷いてあるから、疊の古びだけは分明でない。この客間の西側には、更紗の唐紙が二枚あつて、その一枚の上に古色を帶びた壁懸けが一つ下つてゐる。麻の地に黃色に百合のやうな花を繡つたのは、津田青楓氏か何かの圖案らしい。この唐紙の左右の壁際には、餘り上等でない硝子戸の本箱があつて、その何段かの棚の上にはぎつしり洋書がつまつてゐる。それから廊下に接した南側には、殺風景な鐵格子の西洋窓

津田青楓
畫家
名は龜次郎
明治十三年京都生

藏澤
伊勢の僧
畫に巧であつた
黄興
支那民國革命の
最初の元帥

木庵
黄檗宗の僧
宇治萬福寺の第
二世
支那泉州より歸
化す
貞享元年(一六八四)
寂
年七十四

吳昌蹟
支那の書家畫家
上海に住む
近年歿した

安井曾太郎
西洋畫家
明治二十一年京
都生

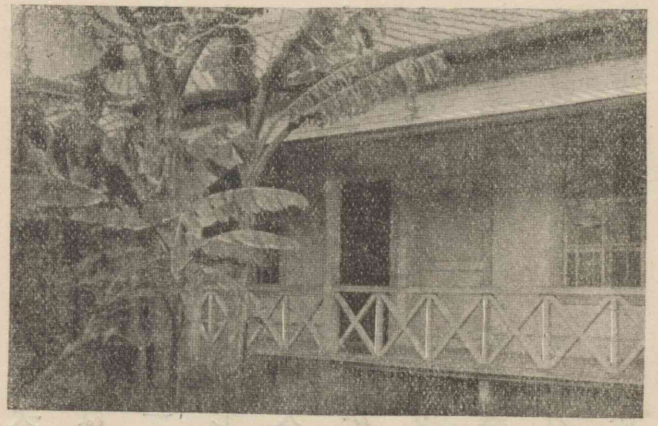
齋藤與里
西洋畫家
名は與里治
明治十八年埼玉
縣生

の前に大きな紫檀の机を据ゑて、その上に硯や筆立が、紙絹の類や法帖と一緒に、存外行儀よくならべてある。その窓を剩した南側の壁と向ふの北側の壁とには、殆ど軸の懸つてゐなかつたことがない。藏澤の墨竹が黄興の「文章千古事」と挨拶をしてゐることもある。木庵の「花開萬國春」が吳昌蹟の木蓮と鉢合はせをしてゐることもある。が、客間を飾つてゐる書畫は獨りこれらの軸ばかりではない。西側の壁には安井曾太郎氏の油繪の風景畫が、東側の壁には齋藤與里氏の油繪の草花が、さうして又北側の壁には明月禪師の無絃琴と云ふ草書の横物が、いづれも額になつて懸つてゐる。その額の下や軸の前に、或は銅瓶に梅もどきが、或は青磁に菊の花がその時々で投げこんであるのは、無論奥さんの風流に相違あるまい。

明月禪師
眞宗の僧
書を善くす
周防に生れ伊豫
國松山に住す
寛政九年(一七九七)
寂
年七十一

もし先客がなかつたなら、この客間を覗いた眼を更に次の間へ轉じなければならぬ。次の間といつても客間の東側には、唐紙も何もないのだから、實は一つ座敷も同じ事である。唯此處は板敷で、中央に擴げた方一間あまりの古絨毯の外には、一枚の疊も敷いてはない。さうして東と北と二方の壁には、新古和漢洋の書物を詰めた、無闇に大きな書棚が並んでゐる。書物はそれでもつまりきらないのか、ぢかに、下の床の上へ積んである數も少くない。その上やはり南側の窓際に置いた机の上にも軸だの法帖だの畫集だのが雜然と堆く盛り上つてゐる。だから中央に敷いた古絨毯も、四方に並べてある書物のおかげで、派手なるべき赤い色が僅かばかりしか見えてゐない。しかもその眞中には小さな紫檀の机があつて、その又机の向ふには座蒲團が

二枚重ねてある。銅印が一つ、石印が二つ三つ、ペン皿に代へた竹の茶筅、その中の萬年筆、それから玉の文鎭を置いた一綴の原稿用紙——机の上にはこの外に老眼鏡が載せてある事も珍しくない。その眞上には電燈が煌々と光を放つてゐる。傍には瀨戸火鉢の鐵瓶が蟲の啼くやうに滾つてゐる。もし夜寒が甚だしければ少し離れた瓦斯煖爐にも赤々と火が動いてゐる。さうしてその机の後、二枚重ねた座蒲團の上には、何處か獅子を想はせる、脊の低い半白の老人が、或



漱石山房

は手紙の筆を走らせたり、或は唐本の詩集を飜したりしながら、端然と獨り坐つてゐる。……漱石山房の秋の夜は、かういふ蕭條たるものである。（芥川龍之介全集—沙羅の花）

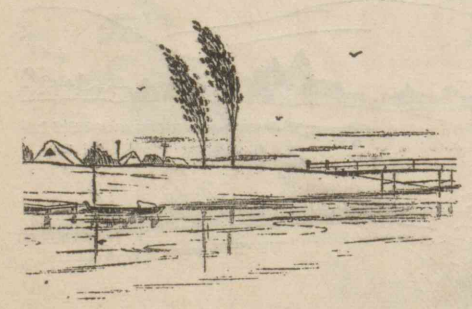
正富汪洋
詩人
本名は由太郎
明治十四年岡山縣生

七　秋風

正富汪洋

空高く、そゝりたつ古城へと、
草靡け、山を越え、川わたり、
秋の風吹く、秋の風ふく。

鬣をふるふ馬、川舟に
持上げた網の目の白き水、
吹かるゝよ、ふかるゝよ。



岸ぞひの粟畑・芋畑、
江の上を飛びわたる雀二羽、
　吹かるゝよ、ふかるゝよ。

山寺の銀杏の樹、石段に、
海を見て、落葉掃く尼の頸、
　吹かるゝよ、ふかるゝよ。

はた〳〵と白き帆や、舟の中、
飛び跳る小魚らの口の内、
　吹かるらし、ふかるらし。

青海波
雅樂の曲
もと天竺樂
波の模樣をつけた服を着て舞ふ

こゝろよい青海波、樂人の
磯馴松、和して打つ岩鼓、
　吹かるらし、ふかるらし。

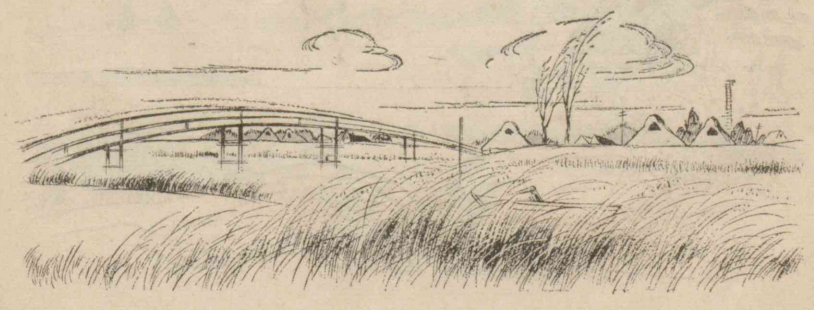
旅人が杖もちて、記したる
砂の文字、さし上ぐる蟹剪刀、
　吹かるらし、ふかるらし。

行く人の、とだえたる橋の上
過ぎて往く野鼠の口ひげを、
　風の吹く、かぜのふく。

繁り立つ眞菰草、ざわ〳〵と、
人の無き舟ばたに、影織れと、
風の吹く、かぜのふく。

少女らが、菱の實の、殼除りて、
古池に、つまみ喰ふ、指さきを、
風の吹く、かぜのふく。

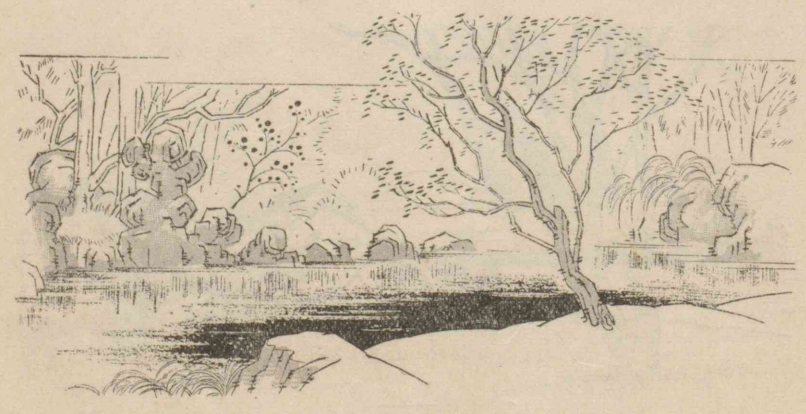
刀豆の搖れる竹、其の下の
土の上、仰向けに鳴く蟬を
風なぶる、風弄る。



女郎花、搖らるゝに、美しい
袖ひろげ、飛ばんかの蟷螂を、
風弄る、風なぶる。

小徑來て裾にある草の實を、
拂へども、落ちざるに、下ぐる鬢、
風弄る、風なぶる。

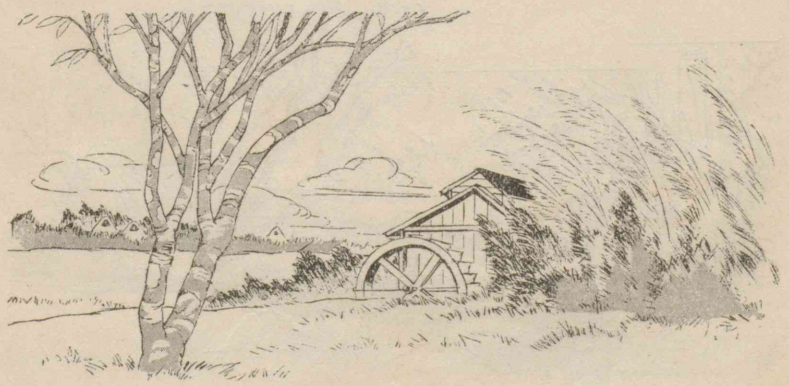
水減りて崖高く凹みたる
河岸の黑色の濕り土、
風流る、風ながる。



藪かげの幾日も、動かざる
米搗きの水車、その羽に、
風流る、かぜながる。

川べりの宿屋の灯、寂しげに、
瞬きて、水遠き橋板に、
風うたふ、風唱ふ。

村社、高麗犬の前肢に、
みたらしの手拭に、玉垣に、
風唱ふ、風うたふ。



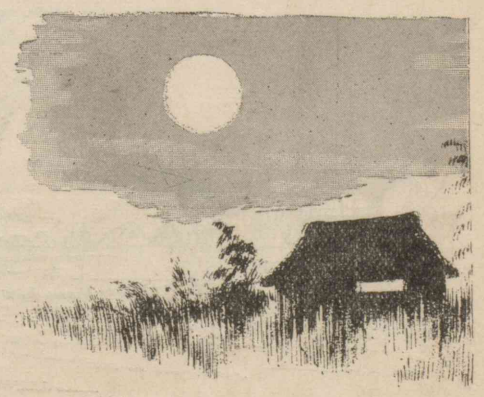
樅の樹に、青鷺に、蓼の穂に、
粟殼に、龍膽に、蕎麥莖に、
風うたふ、風唱ふ。

相觸るゝ兵器かと怪しめど、
月の夜、ひとつ家の木戸の錠、
風鳴らす、かぜ鳴らす。

星と月、高く照り、雁飛べば、
五位啼けば、藤の實を、大杉を、
風鳴らす、かぜ鳴らす。

瓦燈窓　上を狹く下を廣く瓦燈の形に作つた窓

月一つ、荒海をすゝむさま、
夢にみるうた人の瓦燈窓、
風鳴らす、かぜ鳴らす。
旅人の肌に入り、ふるさとの
爐を圍む同胞を想へよと
秋の風吹く、あきの風吹く。（詩と隨筆集）



阿部次郎
哲學者
東北帝國大學教授
明治十六年山形縣飽海郡生

八　雜草

阿部次郎

去年の秋植ゑたばかりでまだ疎らな芝草の間に、猛烈な勢で雜草が蔓り出した。まだ丈の低いうちは、同じ綠の色に交つてそんなには眼に立たなかつたが、丈の伸びるに從つてそれが眼ざはりになり出して來た。それで私は毎朝まだ涼しいうちに、朝飯前の運動として草取をすることを思ひついた。此の頃になれば宵の口からしつとりとおりる露が朝になつて益〻繁く置いてゐるのを跣足の足裏で踏む冷さがいゝ心持である。

三四十坪ある芝地の片端からそろ〳〵と草をとつて行きながら、考へかけてゐることを考へ進めて行くとき、其處には、机の前に坐つてゐるときとは又別樣のリズムが生まれる。固より私の草取は遊戯の一種に過ぎないが、この遊戯は私に、筋肉勞働は―特に土を相手にする筋肉勞働は、一種特別の勞働であることを感じさせる。筋肉勞働だけが勞働でないことは言ふまでもない。併しそれは頭の勞働とは違つた一種特別の勞働である。

トルストイ　Leo Nikoleievitch Tolstoy (1828—1910)　ロシヤの文學者で思想家

さうしてトルストイなどが考へたやうに、それはあらゆる人にとつて必要な勞働であつて、或程度までこの勞働と接觸することを怠るとき、恐らくその人の生活全體に或種類の報いを齎さずにはゐないやうな性質のものである。土を相手にする筋肉勞働には、これを無視する者の觸れ得ないやうな、健全な喜と苦しみとがあるであらう。單にこの一點から考へても、土地と農業とを忘れた文化が本質的に人間を幸福にする力があるかどうかは疑はしい——私はかういふやうな身の程を忘れたことを考へながら、芝草の間にまじる雜草を拔捨てゝ行く。

芝草の間にまじつて最も勢力を逞しくしてゐるのは、葉が芝に似てもつと丈高く伸び、根の方に少し赤みを帶びた何とかいふ草である。私は一種の憎みを以て遠慮なしにこの似せものを

拔捨てゝしまふ。異臭を持つてゐるどくだめもまた私の愛惜を受けることが出來ない。併し鐵火箸のやうに諛ひ氣のない莖に、折から淡褐色の花ともいへないやうな花をつけてゐるかやつり草になると、私の手は前ほど勇敢にこれをむしり取ることが出來ない。さうして愛惜の心を持つて芝の間にまじる雜草を眺めはじめると、其處には何といふ多樣な可愛らしい植物の種類が、この狹い空間にその生を營んでゐることであらう。圓い葉の柔かなものや、葵の葉の樣な形をして三四葉集つて一つの圓居をしてゐるものや、赤みを帶びた小さい莖を横に這はせながら、芝草のすき間に謙遜な自分の領分を占めてゐるものや、見るに從つて新しい種類が目について來る間に、淡紫や黄色の小さい〳〵花さへ咲いてゐるではないか。私は此等の小さ

い可愛いものを拔捨てるに忍びなくなつて、彼の憎むべき似せものだけをあさつてこれを退治して行く。

併し、この似せものを根治することだけでも容易ではない。大抵取盡くしたつもりで一兩日たつと、いつの間にか彼等は又芝より高くその丈を挺でて、その存在を其處にも此處にも告知らせてゐる。眞晝の光がぎら〳〵と照つてゐるうちは、すべての葉が一樣にその光を照りかへしてゐるので、それがそんなにも目立たないが、朝の柔かな光が草葉に置く露を目立たせてくれるときには、露を宿して白銀色を帶びたその葉は、とても自分をかくすことが出來ない。かくて又私にはその朝の仕事が與へられるのである。（三太郎の日記）

十返舍一九
江戸後期の戯作者
本名重田貞一
駿府生
天保二年（一八三一）歿
年五十七

こゝ
今の靜岡縣遠江國小笠郡日坂村

鹽井川
靜岡縣遠江國掛川町の東にある

九　鹽井川

十返舍一九

東雲まだき驛路の忙しげに牽きつるゝ朝出の馬の嘶に、旅疲の目を擦りながら、彌次郎・北八起き出でて支度し、こゝを立出で、鹽井川といふ處に至りけるに、昨日の雨强くして橋落ちけるにや、行きかふ人みづから股引をとり、裾まくり上げてこゝを渡るに、彌次郎・北八も、いざや引連れ渡りなんとする折柄、京のぼりの座頭二人連、此の川の步渡なるを聞きけるにや、一人の座頭、犬市「もし、川は膝きりもござりますかな。」北八「さやう〳〵、しかし水が早いからおめい方あ、あぶない。用心して渡んなせえ。」犬市「はて、成程水の音がよつぽど早い。」といひつゝ、石を拾ひ、川の中へ投げこんで考へ、犬市「いや、こゝらがどうか淺いやうだ。こりや猿市、二人ながら脚絆をとるも面倒だ。お主若役におれをおぶつ

さんなむめで
りやんごうさい
拳を打つときの
呼聲

て渡れ。」猿市「はゝゝ、ずるい事をぬかす。拳でまゐらう。何でもまけた者がおぶつて渡るのだ、よしか。」犬市「こりや面白い。さあ來い、さんなむめで。」猿市「りやんごうさい〳〵。」と片手拳をうちながら、兩方から左の手を出した。互に拳をうつ手を握り合ひ、握り合ひ、犬市「さあ、勝つたぞ、〳〵。」猿市「えゝいま〳〵しい。そんならこの風呂敷包を貴樣一緒に背負はつせえ。それ、よしか。さあ來い、〳〵。」と支度して背中を向ける。彌次郎「これは有難い。」と猿市におぶされば、猿市は連の犬市と心得て、さつと川へはひり、難なく向ふへ渡ると、こなたの岸に殘りたる犬市、犬市「やい、猿よ、どうする。早く川を渡さぬか。」猿市向ふの岸にて聞きつけ、猿市「こりや冗談な奴だ。たつた今おぶつてわたしたに、またそつちへいつておれをなぶるな。」犬市「ばかあいへ。おのればかり渡つて太い奴だ。」猿市「いや、太いとはそつちのことだ。」犬市「こりや、おのれ兄弟子に向つて言語道斷な。早く來て渡さぬか。」と、白い目をむき出し腹立つたるゆゑ、猿市仕方なくまたこちらへ渡り歸り、猿市「さあ、そんならおぶさりなさろ」と背中を出す。北八、しめたと手を掛けておぶされば、猿市またさつさと川へはひる。犬市は大いにせきこみて、犬市「これ、猿市、どこにゐる。」猿市、川の中にて、猿市「いや、こいつは誰だ。」と、北八を川の中へどんぶり落す。北「やあい、助けてくれ、〳〵。」と、手足をもがき流れるゆゑ彌次郎飛びこみ引きあぐれば、頭から骨まで腐るほど濡れ、北「えゝ座頭めが、とんだ目に遇はしやがつた。」彌「はゝ、はゝゝ、まづ着物を脱ぎやれ、絞つてやらう。」北「全體彌次さんがわるい。なんのおぶさらずともいゝことに、お前が手本を出したから、ついお

れも。」彌「川へはまつたか、氣の毒な。はゝゝゝ、それで一首やらかした。

はまりけり目のなき人と侮りてむくいは早き川のながれに

北「えゝ聞きたくもねえ。よしてくんな。あゝ、寒い、〳〵。」裸になり、がた〳〵震へながら着物を絞る。この内、座頭は川を渡り行過ぎる。彌「こゝで干してもゐられねえから、着換を出して着やれ。どこぞで火を焚いて貰つてあぶるがいゝ。」北「えゝいまいましい。風を引いた。はあくつしやみ。」と、ぶつ〳〵小言をいひながら、着換を出して着換へながら、くさつた着物は絞つて引提げ、出掛けると程なく掛川の宿に至る。（東海道中膝栗毛）

菊池寛
小説家
戯曲家
明治二十二年香川縣高松市生

筒井順慶
松永久秀
荒木村重
和田惟政
別所長治

10 形

菊池寛

攝津半國の主であつた松山新介の侍大將中村新兵衛は、五畿内・中國に聞えた大豪の士であつた。

其の頃畿内を分領して居た筒井・松永・荒木・和田・別所など大名・小名の手〻の者で、「鎗中村」を知らぬ者は恐らく一人も無かつただらう。それほど新兵衛は扱き出す三間柄の大身の鎗の鋒先で、魁・殿の功名を重ねて居た。その上彼の武者姿は戰場に於て、水際立つた華やかさを示して居た。火のやうな猛々緋の陣羽織を着て、唐冠纓金の兜を被つた彼の姿は、敵味方の間に、輝くばかりのけざやかさを持つて居た。

「あゝ猛々緋よ、唐冠よ。」と、敵の雜兵は、新兵衛の鎗先を避けた。味方が崩れ立つた時、激浪の中に立つ巖のやうに、敵勢を支へてゐ

る猩々緋の姿は、どれほど味方にとつて頼しいものであつたか分らなかつた。又嵐のやうに敵陣に殺到する時は、その先登に輝いてゐる唐冠の兜は、敵にとつてどれほどの脅威であるか分らなかつた。

かうして「鎗中村」の猩々緋と唐冠の兜は戰場の華であり、味方にとつては信頼の的であつた。

「新兵衛どの、折入つてお願がある。」

と元服してからまだ間のないらしい美男の士は新兵衛の前に手を突いた。

「何事ぢや、そなたとわれらの間に、さやうな辭儀は入らぬぞ。望といふを早う言うて見い。」

と育むやうな慈顔を以て新兵衛は相手を見た。

その若い士は、新兵衛の主君松山新介の子であつた。そして、幼少の頃から、新兵衛が守役として我が子のやうに慈み育てゝ來たのであつた。

「外の事でもおりない。明日はわれら初陣ぢやほどに、何ぞ華華しい手柄をして見たい。就いては、御身の猩々緋と唐冠の兜を借してたもらぬか。あの陣羽織と兜とを着て、敵の眼を駭かして見たうござる。」

「はゝゝゝ念もない事ぢや。」

新兵衛は高らかに笑つた。新兵衛は相手の子供らしい無邪氣な功名心を快く受容れる事が出來た。

「が、申して置く。あの陣羽織や兜は、申さば中村新兵衛の形ぢやは。そなたがあの品々を身に着ける上からは、われらほど

の肝魂を持たいでは叶はぬことぞ。」

と云ひながら、新兵衛はまた高らかに笑つた。

そのあくる日、摂津平野の一角で、松山勢は大和の筒井順慶の兵

筒井順慶
織田豐臣時代の武人
天正十二年(一五八四)歿
年三十六

唐冠の兜

と鎬を削つた。戰が始る前、何時ものやうに猩々緋の武者が唐冠の兜を朝日に輝かしながら、敵勢を尻目にかけて、大きく輪乘をしたかと思ふと、駒の頭を立直して、一氣に敵陣に乘入れた。

吹分けられるやうに、敵陣の一角が亂れた所を、猩々緋の武者は鎗を附けたかと思ふと、早くも三四人の端武者を突伏せて、又悠悠と味方の陣へ引きかへした。

その日に限つて、黒皮縅の鎧を着て、南蠻鐵の兜を被つて居た中村新兵衛は、會心の微笑を含みながら、猩々緋の武者の華々しい武者振を眺めて居た。そして自分の形だけですらこれ程の力を持つて居るといふことに、可なり大きい誇を感じて居た。

彼は二番鎗は自分が合はさうと思つたので、乘出すと、一文字に敵陣に殺到した。

猩々緋の武者の前には、戰はずして浮足立つた敵陣が、中村新兵衛の前には、びくともしなかつた。その上に、彼等は猩々緋の「鎗中村」に突きみだされた恨を、此の黒皮縅の武者の上に復讐せんとして猛り立つて居た。

新兵衛は何時もとは勝手が違つて居ることに氣が附いた。何時もは虎に向つて居る羊のやうな怖氣が敵に在つた。彼等が

狼狽へ血迷ふ所を突伏せるのに、何の造作もなかつた。今日は彼等は對等の戰をする時のやうに勇み立つて居た。どの雜兵もどの雜兵も十二分の力を新兵衞に對して發揮した。二三人突伏せることさへ容易ではなかつた。敵の鎗の鋒先がともすれば身をかすつた。新兵衞は必死の力を振つた、何時もの二倍の力をさへ振つた。が彼はともすれば突き負けさうになつた。手輕に兜や猩々緋を貸したことを後悔するやうな感じが頭の中を掠めた時であつた、敵の突き出した鎗が裏をかいて彼の脾腹を貫いて居た。（菊池寛全集—極樂）

二葉亭四迷
文學者
新聞記者
本名は長谷川辰之助
江戸生
明治四十二年歿
年四十八

二　ポチ

二葉亭四迷

僕は元來動物ずきで、別して犬は大好きだから、近所の犬は大抵馴染だ。けれども、こんなかぼそい、いたいけな聲で啼くのは、一匹も無い筈だから、不思議に思つて、そつと夜着の中から首を出すと、

「どうしたの。寢られないのかえ。」

と、母が寢反りを打つてこちらを向いた。僕は此の返答は差措いて、

「あれは白ぢやないねえ、阿母さん。もつと小さい犬の聲だねえ。どうしたんだらう。」

「棄犬さ。」

「棄犬つてなあに。」

「棄犬つて……誰かゞ棄てゝいつたのさ。」

僕はしばらく考へて、

「誰が棄てゝいつたんだらう。」

「大方何處かの……何處かの人さ。」

何處かの人が犬を棄てゝいつたと、私は二三度反復して見たが分らない。

「どうして棄てゝいつたんだらう。」

「うるさいよ。」などといふ母ではない。何處までも相手になつて、其の意味を説明してくれて、「もう晩いから默つてお寐」と優しく言つて、又あちらを向いてしまつた。

僕も亦夜着を被つた。犬は門前を去つたのか、啼聲が稍〻遠くなるにつれて、父の鼾が又蒼蠅く耳に附く。寐られぬ儘に、僕は夜着の中で、聽いた母の説明を繰返し〳〵味はつて見た。

まづどこかの飼犬が緣の下で兒を生んだとする。ちひさな、むくむくしたのが重なり合つて首を擡げて、みい〳〵と乳房を探してゐる處へ、親犬が餘處から歸つて來て、其の側へどさりと横になり、片端から抱へ込んでべろ〳〵舐めると、小さいから舌の先で他愛もなくころ〳〵ところがされては大騒して起き返り、又よち〳〵と這寄つて、ぽつちりと黑い鼻面でお腹を探り廻り、漸く思ふ柔かな乳首を探り當て、狼狽へてちうと吸附いて、小さな兩手で揉立て〳〵吸出すと、甘い溫かな乳汁がどくどくと出て來て、咽喉へ流れ込み、胸を下つて、何とも言へずおいしい。と腋の下からまだ乳首に有附かぬ兄弟が鼻面で割込んで

長谷川二葉亭

來る。奪られまいとして、產毛の生えた腕を突張り、大騷をやつてみるが、到頭奪られて了ひ、又其處らを尋ねて、他の乳首に吸附く。その中にお腹もよくなり、親の肌で身體もあたゝまつて融けさうな好い心持になり、ついうと〳〵となると、含んだ乳首が脫けさうになる。夢心地にも狼狽へて又吸附いて、一しきり吸立てるが、直に又他愛なくうと〳〵となつて、乳首が遂に口を脫ける。脫けても知らずに口を開いて、小さな舌を出したなり、一向正體がない。

其の時忽ち暗闇から、もぢや〳〵と毛の生えた、節くれ立つた大きな腕がぬつと出て、正體なく寐入つてゐる處を無手と引摑み宙に吊す。驚いて目をぱつちり明き、いたいけな聲で悲鳴を揚げながら、四足を張つて藻搔く中に、頭から何かで包まれたと見

えて眞暗になる。窮屈で息氣が詰りさうだから、出ようとするが出られない。暫く藻搔いて居る中に、ふと足搔が自由になる。と、領元を抓まれて、高い〳〵處からどさりと落された。うろうろとして其處らを見廻すけれど、何だか變な寂しい眞暗な處で、誰も居ない。茫然としてゐると、雨に打たれて見る間に濡れしよぼたれ、おそろしく寒くなる。身慄ひ一つして、くん〳〵と親を呼んで見るが、何處からも出て來ない。途方に暮れてよちよちと這出し、雨の夜中を唯ひとり溫かな親の乳房を慕つて悲しげに啼廻る聲が、先刻一度門前へ來て、また何處へか彷徨つて行つたやうだつたが、それが何時か又戻つて來て、何處をどうもぐり込んだのか、今は啼聲が正しく玄關先に聞える。

「阿母さん〳〵、門の中へ入つて來たやうだよ。」

と、僕が何だか居たゝまらないやうな氣になつて、又母に言掛けると、母は氣の無さゝうな聲で、

「さうだね。」

「出て見ようか。」

「出て見ないでもいゝよ。寒いぢやないかね。」

「だつて……あらあんなに啼いてる……。」

と折柄絶え入るやうに啼入る犬の聲に、僕は我知らずむつくり起き上つたが、何だか一人ではこはいやうな氣がして、

「よう、阿母さん、行つて見よう、よう。」

「本當に仕樣がない兒だね。」

と、口小言を言ひ〳〵母も澁々起きて、雪洞を點けて立上つたから、私もその後について、玄關、と云つてもつい次の間だが、玄關へ

出た。

母が履脫へ降りて格子戸の掛金を外し、からりと雨戸を繰ると、さつと夜風が吹込んで、雪洞の火がちら〳〵と靡く。其の時小さな鞠の樣なものがつと軒下を飛退いた樣だつたが、軈て雪洞の火先が立直つて、一道の光がさつと戸外の暗黑を破り、雨水の處々に溜つた地面を一筋細長く照らし出した處を見ると、ついに其處に生後一箇月も經たぬ、むく〳〵太つた、赤ちやけた狗兒が、小指程の尻尾をちぎれさうに振立てゝ、此方を見上げてゐる。體は僕が寢てゐて想像したよりも大きかつたが、果して全身雨に濡れしよぼたれて泥だらけになり、だらりと垂れた割合に大きい耳から雫を滴し、ぽつちりと兩つの眼を靑貝のやうに列べて光らせてゐる。

「おや〳〵まあかはいらしい。」

と母もつい言つてしまつた。況や僕は犬好だ。じつとして見ては居られない。母の袖の下から首を出して、ちよつ〳〵と呼んで見た。

と、左程恐れた樣子もなく、ちよこ〳〵と側へ來て、流石に少し平べつたくなりながら、頭を撫でてやる僕の手を、下からぐい〳〵押上げるやうにして、べろ〳〵と舐廻し、手をくれる積りなのか、頰に圓い前足を擧げてばた〳〵やつてゐたが、果はやんはりと痛まぬ程に小指を咬む。

僕はかはいくて〳〵たまらない。母の顏を見上げながら、少し鼻聲を出し掛けて、

「阿母さん何かやつて。」

「やるもいゝけど、居附いてしまふと仕方がないねえ。」

と、口では拒むやうな事を言ひながら、それでも臺所へ行つて、缺茶碗に冷飯を盛つて、何かの汁を掛けて來てくれた。早速履脫へ引入れてこれをあてがふと、狗兒は一寸香を嗅いで、すぐ甘さうに先づぴちや〳〵と舐出したが、汁が鼻の孔へ入ると見えて、時々くしん〳〵と小さな嚏をする。忽ち舐盡くして、今度は飯に掛つた。他に爭ふ兄弟も無いのに、頻に小言を言ひながらがつがつと食べだしたが、飯はまだ食べなれぬかして、とかく上顎に引附く。首を掉つて見るが、そんな事ではなか〳〵取れない。果は前足で口の端を引搔くやうな眞似をして、大藻搔きに藻搔く。此の隙に僕は母と談判を始めて、今夜一晩泊めてやつてと雪洞を持つた手にぶらさがる。母は一寸澁つたが、もうかうな

つては仕方がない。「阿父さんに叱られるけれど。」と言ひながら、つまり棧俵法師を捜して來て、履脱の隅に敷いてやつた。それは好かつたが、其の晩一晩啼通されて、私はちつとも知らなかつたが、お蔭で母は父に小言を言はれたさうな。

犬嫌な父は泊めた其の夜を啼明かされてしまふとうんざりしてしまつて、翌くる日は是非逐出すと言出したから、僕は小犬を抱いて逃廻つて、どうしても放さなかつた。父は困つた顔をしてゐたが、併しそれも一時の事で、その中に小犬も獨寢に慣れて夜も啼かなくなる。と、逐出す筈のものに、いつしかポチといふ名まで附いて、姿が見えぬと父までが一緒に捜すやうになつてしまつた。

父がかうなつたのも無論ポチを愛したからではない。唯僕に

牽かされたのだ。私とてもポチを手放し得なかつたのは、強ちポチを愛したからではない。愛す、愛さんはさておいて、僕は唯かはいさうだつたのだ。親の乳房に縋つて居る所を、無理に無慈悲な人間の手に引離されて、暗い浮世へ突放された犬の兒の運命が子供心にも果敢なく情ないやうに思はれて手放すに忍びなかつたのだ。

この忍びぬ心とその忍びぬ心を破るに忍びぬ心と、二つの忍びぬ心の搦み合つた所にポチは旨く引懸つて、辛くも棒石ころの危ない浮世に彷徨ふ憂目を免れた。で、どうせそれは蜘蛛の巣だらけではあつたらうけれど、ともかくも雨露を凌ぐに足る緣の下の菰の中で、旨くはなくとも朝夕二度の汁懸飯に事缺かず、まづ無事にのんびりと育つた。

育つにつれて、まる〳〵と太つてかはいらしかつたのが、身長に幅をとられて、ひよろ長くなり、而もひどくとぎすになつて、一寸狐のやうな犬になつてしまつた。前脚を突張つて、尻をもつたてゝ、弓のやうに反つて伸をしながら大きな口をあんぐりあいて欠をする所などは、誰が眼にも餘り見つともよくなかつたから、父は始終「いやな犬だ。」「いやな犬だ。」と言つて私をいやがらせたが、僕はそんなことで愛をさますやうな心は聊かも無い。いやな犬だと言はれるほどなほかはいゝ。

「ねえ阿母さん、こんな犬は何處へ行つたつて、かはいがられやしないねえ。だから内でかはいがつてやるんだねえ。」

といつも苦笑する母を無理に味方にして、揶揄ふ父と爭つた。

犬好は犬が知る。僕のこの心はポチにも自然と通じてゐたらしい。その證據には犬嫌の父が呼んでもぼんの一寸お愛想に尻尾をふるばかりで、振向きもせんで往つてしまふことがある。母が呼ぶと、不斷食事の世話になる人だから、又何か貰へるかと思つて眼を輝かして飛んで來る。さうして母の手の中にそれらしい物があれば兎のやうに跳ねて喜ぶ。が、しかし唯それだけの事で、その時のポチはやつぱり犬に違ひない。

そのやつぱり犬に違ひないポチが私に對ふと、犬でなくなる。それとも私が人間でなくなるのか。どつちだかそれは分らないが、とにかく互の情愛に人畜の差別をなくして、渾然として一如となるのである。（二葉亭全集――平凡）

三　二葉亭の文章

内田魯庵

内田魯庵
文學者
名は貢
東京生
昭和四年歿
年六十二

魏叔子
魏叔子文集二十二卷
清の魏禧の文集
議論文が得意

壯悔堂
壯悔堂全集十七卷
清の侯方域の詩文集
傳記がよい

鴨長明
鎌倉初期の隱逸で文學者
方丈記の著者

馬琴
江戸後期の文學者
瀧澤解の號
八犬傳等の著者
嘉永元年(一八四八)歿
年八十二

京傳
江戸後期の戯作者
本名は岩瀬醒
文化十三年(一八一六)歿
年五十六

三馬
江戸後期の戯作者
式亭三馬
本名菊池泰助
浮世風呂・浮世床の著者
文政五年(一八二二)歿
年四十八

近松
江戸前期の戯曲作家
近松門左衛門
本名杉森信盛
享保九年(一七二四)歿
年七十二

二葉亭は始終文章を氣にしてゐた。文人が文章に氣を揉むのは當然のやうであるが、偶像破壞時代の文人は過去の一切の文章からは全く離れて、自由でありさうなものである。極端に言へば、思想さへ思ふやうに表現する事が出來るなら、形式や修辭はどうでもよかりさうに思はれる。

二葉亭墓標

は隨分思切つた放膽な議論もしたが、いざ自分が筆を執る段となると、假名遣から豆爾乎波、漢字の正訛、熟語の適否、若い文人が

好い加減に創作した出鱈目の造語から句讀の末に至るまで、一一詮索して精究する、實に小心翼々たるものであつた。あの時代の人は大抵漢文の素養があつたから文章の稽古には可なり苦しんでゐた。中には文學卽ち文章といふ誤つた考を吹込まれてゐるものも多くあつた。當時の文章教育といふのは古文の模倣であつて、山陽が項羽本紀を何百遍反復して盡くそれを諳記したといふやうなことが根深く注ぎ込まれてゐた。二葉亭も根が漢學育ちで魏叔子や壯悔堂を毎日繰返し、同じ心持で清少納言や鴨長明を讀み、馬琴や京傳・三馬の近世文學まで究め、課題の文章を練習するつもりで近松や馬琴の眞似をしたり、或は俗文を漢譯したり、漢文を俗譯したりした。從つて文章を氣にすることは甚だしかつた。一面には從來の文章型を根本か

ツルゲーネフ　ロシヤの小説家　二葉亭はあひびきめぐりあひなどを譯したドストエフスキー

Turgenieff (1818–1883)

Dostoyevsky (1821–1881)　ロシアの小説家

ら破壞した改革家でありながら、一面に於ては亦極めて神經的な新しい雕蟲の技術家であつた。

自分は小說家で無いとか文人になれないとか云つたのには、種種の意味があつたらうが、自ら文章の才が無いとあきらめたのも亦有力なる理由の一つであつた。二葉亭の作を讀んで文才を疑ふ者は恐らく無からうと思ふが、二葉亭自身は常に自己の文才を危んで、神經的に文章を氣に病んでゐた。文章上の理想が餘り高過ぎたといふよりも、昔の文章家氣質が失せなかつたのであらう。ツルゲーネフを愛讀したのも文章のためであつて、晩年餘り感服しなくなつてからも、なほその精妙な修辭には、傾倒してゐた。ドストエフスキーの「罪と罰」は露國の最大文學であると確認しつゝも、なほその文章は、から下手で、まるで成つ

露伴　小說家　文學者　幸田成行　慶應三年（一八六七）江戸生

紅葉　尾崎德太郎　小說家　江戸生　明治三十六年歿　年三十七

西鶴　江戸前期の小說家　井原西鶴　元祿六年（一六九三）歿　年五十二

てゐないと云つてゐた。そんな風で、文學上の批判がともすれば文章の好惡に囚はれてゐた。例へば當時の文學者についても、露伴を第一人者であると推しながらも、座右に置いたのは紅葉全集であつた。近松でも西鶴でも內的概念よりはより多く微妙（デリケート）な文章味を鑑賞して、此の言葉の綾が面白いとか、此の引懸けが巧だとかいふやうなことを能く話した。又紅葉の人生觀照や性格描寫を凡常淺薄と貶しながらも、其の文章を古今に匹儔なき名文であると激賞して常に反復細讀してゐた。最も驚くべきは「新聲」とか何々文壇とかいふやうな青年寄書雜誌をすらわざ〳〵購讀して、中學を卒業したかしない位の無名の青年の文章まで一々批點を加へたり評語を施したりして、つぶさに味はつてゐたことである。丁度植物學者が路傍の雜草にまで

興味を持つて精しく研究すると同一の態度であつた。

此の點では私は全く反對であつた。私は性來の惡文であるためであらうが、一體文章を重んじない方で、嘗て紅葉から文壇の野獸視されて、君の文章論は狼の遠吠だと罵られた事があるくらゐである。が、自分のやうな鈍感な者では到底味はふ事の出來ない文章上の微妙な句を二葉亭から聞いては、流石に發明した事もあつたし、洗煉推敲肉の痩せるまでも反復改竄して曾て飽くことを知らなかつたのを見ては、衷心感服せずにはゐられなかつた。特に歿後その遺文を整理して偶然最初の原稿を檢するに及んで、世間に發表した作品と比べて、文章の調子や句や味がまるで別人のやうに違つてゐるのを發見し、二葉亭の五分も隙が無い、一字の增減をも許さない完璧の文章は、全く千鍛萬

徳富健次郎
號は蘆花
文學者
熊本縣水俣町生
昭和二年歿
年六十
息栖
茨城縣鹿島郡中島村大字息栖
鹿島町の南十粁
北浦
茨城縣霞浦の東にある湖
其の水は浪逆浦より利根川に通ず
小見川
千葉縣香取郡小見川町

錬の結果に外ならぬことを今更ながら痛感したのであつた。

（思ひ出す人々）

一三　利根川の秋曉

徳富健次郎

先年の秋十一月の初旬ごろ、利根川の左岸の息栖と云ふ處に泊つた。此處は利根川の本流が北浦の末流と落合ふ處で川幅が濶く、對岸の小見川までは小一里もあらう。宿はすぐ水邊で、夜半に眼をさますと、艪の音がぎい〳〵と枕頭に聞える。翌日は、黎明に起きた。宿の者はまだ寢て居るので、そつと戸を明けて河邊に出ると、其處に薪が積んである。霜を拂つて腰をかけた。天地はまだほの暗い。空も河面も茫として鉛色であつた。裏の方の暗い小屋の中で雞が勇ましく曉を告げると、餘

チェルシー　英國倫敦市の近郊

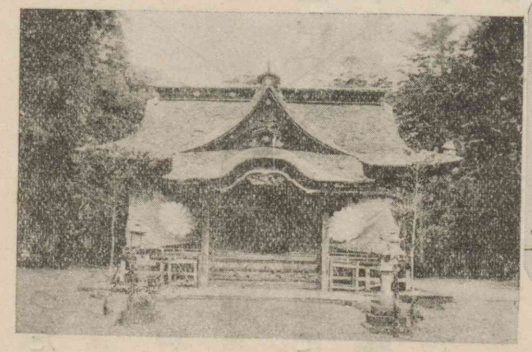
評論家で且史家のカーライルがこゝに住んでゐた

コンコルド　北米合衆國東部の市

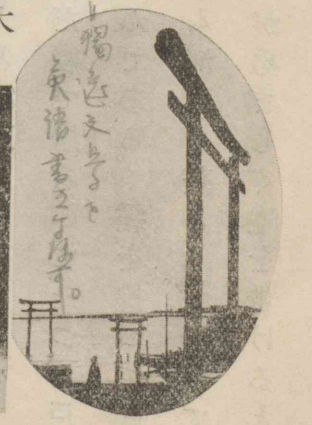
評論家で詩人のエマーソンがこゝに住んでゐた

程たつて、川むかふの小見川の方から、いかにも微かな雞の聲が聞えた。大河を隔てゝ呼びかはす此の雞聲は實によい。チェルシーの賢とコンコルドの哲とは實にかくの如く大西洋を隔てゝ呼びかはしたのであらう。自分の眼には曉は此の兩岸の雞聲の間から川面に涌きあがつて來る樣に思はれた。

暫くすると、小見川の方の空がぼうつと薔薇色になつて來た。と見ると、川面も薄紅を流して、ほやり〳〵水蒸氣



息栖神社



息栖の宮　於岐都說神社　鹿島神宮の摂社

が見えて來た。

實に速い。瞬をする間もないのである。夜は川下の方へ流れて、曙の光は四邊に滿ちて居る。雞はなほ鳴きつゞけてゐる。空と水との薔薇色が少しうつろふ。忽ちきら〳〵とまばゆき光が水にうつる。ふり返つて見ると、朝日は杲々として今息栖の宮の森の梢を離れたのである。その梢を離れる烏が一羽、朝日を負うて、さながら曉を告げ渡る神使の如く、凛とした朝の大氣に羽を搏つて、小見川の方へ飛んで行く。小見川はまだ蒼々とした朝霧の中に眠つて居る。

對岸はまだ眠つて居るが、こちらの村は最早覺めた。背後の茅舍から煙が立上る。今棚を出た家鴨は足跡を霜につけて、くわつくわつと呼びながら、朝日を碎いて水に飛込む。水楊の枝に

小鳥が囀る。今起きて來た村人が白い息を吹き〳〵川に下りて川水を掬んで口を漱ぎ、顏を洗ひ、それから遙かに筑波の方へ向いて、掌を合はせて拜んで居る。「あゝ、實に好い拜殿である。」と自分は思つた。（蘆花全集――自然と人生）

筑波山
息栖の西北八十粁霞浦のあなた平野の中に聳えてゐる

佐々木信綱
歌人
國文學者
文學博士
明治五年三重縣石藥師村生

一四　月の洞庭湖

佐々木信綱

岳陽樓は岳州府城の城壁の東の隅に立つてゐる三層樓である。城壁の甎瓦は幾百年の風霜に黑ずんでゐる。建てなほしてまだ久しからぬ岳陽樓は、金碧燦爛として輝いてゐる。その色彩の配合が極めて美觀である。

船をすてゝ上陸すると、岸邊のこゝかしこに小屋がある。それは「蘆のまろ屋」とでもいひさうな、蘆で蒲鉾形に葺いた低い家で

岳州
支那湖南省岳州府

蘆のまろ屋
夕されば門田のいなば音づれて蘆のまろ屋に秋風ぞ吹く
（金葉集源經信）

ある。その間を通りぬけて高い石段を上り、城門をぬけて岳陽樓を訪うた。案內の僧に導かれ、壁に題した詩や聯の句などを讀んで三層樓の上に登つた。かの范文正公がこゝの記を書いて後、この樓は幾度か重修し、人は變り世は遷つても、天然の景には變遷がない。唯見る、浩々湯々、洞庭湖は眼の前に天地の大幅をひろげてゐる。湖の門戸には彼の堯の女湘君がゐたといふ君山が右に、扁山が左にある。どちらも江の島位の島で、さながら洞庭宮を守る獅子・狛犬である。夕日は今や其の眞中に落ちようとしてゐる。天地の大觀に覺えず吾を忘れて眺めてゐたが、促し立てられて船に歸つた。

幸に風は追手。帆を張つて愈〻洞庭湖を横ぎらうとする。夕日は二つの島の間に落ちて、見る〳〵紅の眞玉が湖心に沈む。顧

范文正公
宋の宰相范仲淹の諡
（一六四九―一七二二）

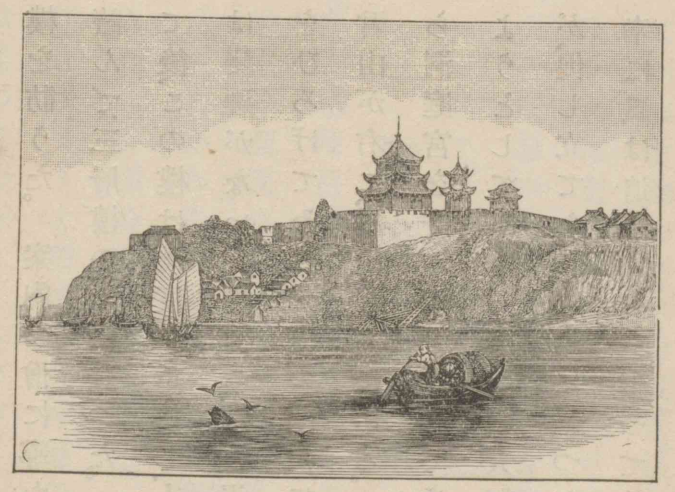
浩々湯々
銜ニ遠山一、呑ニ長江一、浩々湯々、横無ニ際涯一。朝暉夕陰、氣象萬千。此則岳陽樓之大觀也。
（岳陽樓記）

江の島
神奈川縣鎌倉町の西四粁餘にある小島

洞庭八百里
犁雲の句

瀟湘八景
平沙落雁
遠浦歸帆
山市晴嵐
江天暮雪
洞庭秋月
瀟湘夜雨
遠寺晚鐘
漁村夕陽

みれば岳州府城の上に月は昇る。さながら、「洞庭八百里、月照岳陽城。」といふ句をそのまゝ。日を數ふれば恰も陰曆十月十五日の夜である。かの瀟湘八景の一なる洞庭秋月ではないが、望月の夜、洞庭を過ぎるとは、何といふ好因緣であらう。



岳陽樓

夕日は遂に湖心に沈んだ。その餘光が空に輝くや、空の色は忽ち紅に變じ、其の紅の色は湖上に映じて、畫にも寫し難く美しい中を、遙かに一帆、又一帆。風のまに〳〵遠く近く、且顯れ且

長煙一空
「岳陽樓記」中の句

消える。其の言ひ知らぬ風景、寧ろかういふ風景の中に包まれながら、湖の底深く沈んだならばと思はれる。美しかつた夕映も光を失つて、湖の上は薄暗くなる。月は愈〻澄みのぼる。見えるものは唯黃金・白銀の波。「長煙一空、皓月千里。浮光躍金、靜影沈璧。」といふ有樣である。

月は良く、風は追手。船は帆腹飽滿、一瞬千里の勢で進む。夜はふける、月は愈〻澄む。此の意、人の識るなし。言ひ知らぬ樂しさ、寂しさ、何とも言ひ難き感が胸に充ちて、我が身坐ろに吾あるを知らず、此の隈なき月と果なき湖とに對してゐた。一昨年の初秋、富士に登つて、絕頂に見た七月十七夜の月。彼は山頂、此は湖上。併し、あはれは同じあはれで、風月の緣に富むことを天に謝したことであつた。（帝國文學）

佛法僧　鳩より少し小さく嘴と脚が赤く全體青い夏期に我が國の高野山や鳳來寺山木曾あたりに南方から渡つて來る

高濱虛子　俳人小說家名は清明治七年愛媛縣松山市生奥の院高野山の

一五　佛法僧

高濱虛子

夕飯が濟んだのち、「今夜奥の院に往つて佛法僧の啼聲を聞いて來るから、提燈を貸してくれたまへ。」と給仕の小僧さんにいふと、「かしこまりました。」と小僧さんは笑ひながら膳を下げていつたが、いくら待つても來ない。一時間もたつてから、「本當に往くのですか。」と聞きに來る。「勿論、本當に往くさ。」と答へると、「途中で何か出ますよ。」といふ。「何か出る。猿でも出るか。」と聞くと、「新墓から幽靈が出て來ますよ。」といふ。晝間通つて見た時は大名などの古い墓ばかりが目についたが、成程中には新墓もあらう。「新墓の幽靈位何だ。」と元氣なことをいうてやる。小僧さんはまた薄氣味の惡い厭な笑ひやうをして降りていつたが、暫くして二

土蜘蛛　源頼光が土蜘蛛の精を退治する能から出た劇

つ巴の紋のついて居る大きな提燈を持つて來る。さうして「幽靈の外に野衾も出るさうですから氣をおつけなさい。若し二時間もたつてお歸りが無かつたら、お迎にいきます。」としやれた事をいふ。

土蜘蛛の小僧

小僧さん自身で提燈をつけてくれて、「表門は締めてしまつたから、裏口から御案内しませう。」と先に立つ。此の小僧さんは十六だといふに馬鹿に脊が低い。それが大きな提燈を提げてゐるので、少くとも芝居の土蜘蛛に出て來さうな恰好だ。下駄を穿いて臺所の横にまはる。廣い臺所には一つ燈がともつて居るばかりだ。暗闇の中に、二三人の小僧

さんが笑ひながら、我等を見送つて居る。それが提燈の光で纔かに見える。

がり〳〵と音がしたのは、お城で見たことのあるやうな岩疊な裏門のくゞり戸を、小僧さんが先に立つてあけてくれた時、鐵の鎖が戸にきしる音であつた。小僧さんが突出す提燈を受取りながら二人で表に出る。表は暗い。星はあるが、纔かに寺の白い土塀と道との區別がつく位だ。提燈を便りに其の白い土塀に沿うて表通りの奥の院道に出る。

門前の數珠屋ももう戸を下して居る。一の橋を渡ると眞暗な杉木立になる。亭々として天を摩すと形容されさうな大木が襖の如く連なつて居る。其の左右の襖でたて切つた中に、帶のやうに幅の狹い空が見える。其の空には星が光つてゐる。平

生見る星よりは形が大きい。而も其の一帶の星の光では、我等の行手を照らすに足らぬ。我等は提燈の光で纔かに足許を探つて歩く。

晝間は氣が附かなかつたが、縱横に道を横ぎつてゐる木の根の夥しいのに驚かれる。其の木の根は左右に延びるに從つて隆起して、遂に杉の大木に集つて居る。友は提燈をさし上げて其の杉の幹に推しつけるやうにして歩く。友が三間ばかり歩いてもまだ杉の半面を照らし盡さぬ。夜の杉は大きさのわからぬ巨人の如く突立つて居るのである。

寢鳥の立つ音がする。見ると提燈の上から圓筒の如く圓い光が空中に射出されて、それが高い〳〵杉の梢をうろついて居る。寢鳥が泡を食ふのも尤だ。

雨月物語
上田秋成の作
卷三に佛法僧と題して高野山で關白秀次の幽靈に逢ふ物語が載せてある

釣狐
古狐が獵師の叔父白藏主に化けて甥がわかで狐を釣るのをやめさせようとして自ら釣られる

御廟
弘法大師の廟
奥院谷にある

歩きながら友に、雨月物語の話をする。墓原の中に裸火らしい火が二つともつて居る。何處やら心細くなる。かういふ時に野衾が道を塞ぐのだらうと考へる。裸火が見えなくなる。今度は杉木立のずつと奥にうすぼんやりと明るいものが見える。何であらうかと氣にしながら往くと、突然木の間に空が見えて其處に鎌のやうな三日月が懸つて居る。向ふからふら〳〵と提燈が一つ來る。急に見えなくなるのは杉の木に隱れるのであらう。すぐ又現れる。近づいて見ると一人の老僧だ。すれ違ひ樣によく見ると、釣狐の狂言に出る白藏主に似て居る。行手に燈籠らしい燈が三つ燈つて居る。近よつて見ると御廟の橋だ。友が橋の上から提燈をつり下げて水面を照らして見る。玉川の水は火を受けてちら〳〵と流れて居る。燈籠堂は

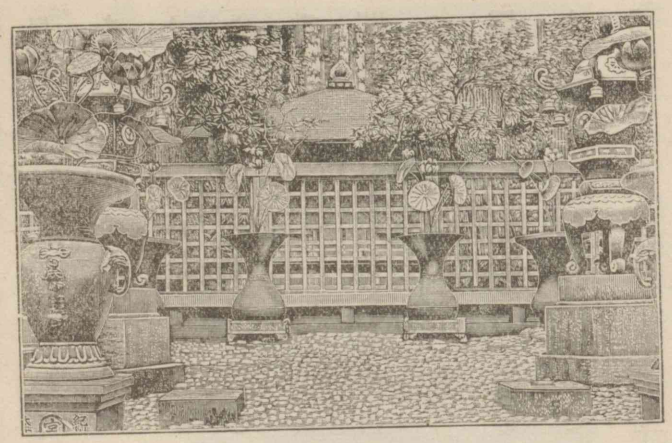
橋
御座の橋一つ橋又大橋ともいふ

玉川
御廟のわきを流れる谷川所謂六玉川の一

燈籠堂
御廟の拜堂
燈籠が澤山ある
その中に弘法大師入寂後祈親上人が献じた一燈は今に滅しないでゐる俗に之を貧の一燈といふ

すぐ其處に在る筈だが、眞暗でそれらしいものは見えぬ。怪しみながら近よつて見ると、すつかり四周の蔀を下して寂然として寂しづまつてゐるやうだ。數百の燈籠のもとに連なつてゐる夜の景色は寂しくも嚴かであらうと思つて樂しみにしてゐたのに、これでは唯眞黑な大きな建物を見るばかりで物足らぬ。

燈籠堂に沿うて御廟の前に出る。御廟の前も眞暗だ。唯廟前に左右六箇の小さい釣燈籠が燈つて居る。其の光で纔かに御廟の

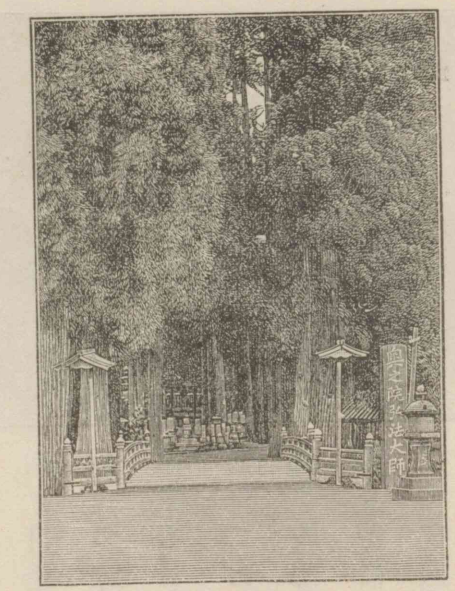


高野山弘法大師廟

屋根と二三本の杉と線香立とが見える。此の線香立には晝間見たときは、煙が雲の如く渦卷いて居つた。其の煙の中に數珠をくすべたり鈴をくすべたりしてゐた信者が、今は一人も見當らぬ。人間が居らぬばかりでなく今は一條の煙も昇つて居らぬ。提燈を中に突込んで覗いて見ると、冷くなつた灰の中に、線香の燃滓の赤い紙が四五本殘骸をとゞめて居るに過ぎぬ。晝間見た時も大きな線香立だと思つたが、寂然として靜まりかへつたところを見ると、愈〻偉大な線香立である。

燈籠堂の裏側の緣に腰をかける。我等より少し離れて緣に置かれた提燈の燈が心細さうに瞬いて居る。遠方で鉦を叩くやうな音が聞える。法隆寺の境內でゝも聞えさうなよい音だ。方角は御廟の後に當る。そんな方に寺は無い筈だが、不思議だ

と思ふ。其の鉦の音に聞きほれてゐると、忽ち近い木の梢でけたゝましい鳴聲が起る。何でも朽木を引裂くやうな殺氣を帶びた聲だ。襟元から手を突込んで背中ぢゆうを搔きまはされたやうな氣持になる。

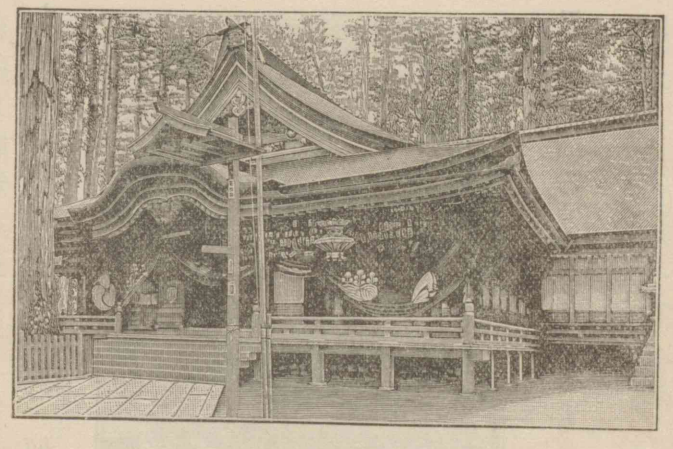


高野山奥の院

鉦の音はまだ聞えてゐる。鉦の音はよい音だが、この鳴聲は眞平だと思つて居ると、又前よりも一層激しいやつが起る。或は天狗のやうな嘴をした鬼のやうな手をした鳥で、忽ち空中から落下し來つて提燈をさらつて行くやうなことはあるまいかと氣にな

る。氣のせゐか提燈の火は一層心細さうに瞬いて居る。

小さい咳拂が聞える。おやと思ふうち又一つ聞える。其の邊に目を配つて見ると、燈籠堂の片隅の障子にちよつとした明りがある。こゝは晝間線香などを賣つてゐた處であるから、直ちに番人の部屋と、想像がつく。試に其の傍に行つて「もし〳〵。」と呼んで見る。「へい。」と返事をする。「ちよつと伺ひますがあのおそろしい鳴聲をする鳥は何といふ鳥ですか。」と聞く。「あれは鳥ぢやない、獸

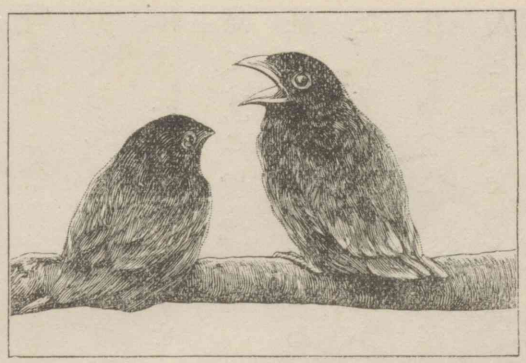


高野山燈籠堂

です。」といふ。「へえ。何と云ふ獸です。」と聞くと、「野衾というて、蝙蝠のやうな鼬のやうな妙な恰好をした獸です。」といふ。あれが野衾かと合點が行く。「それから遠方で鉦が鳴つて居るやうですが、あれは何處ですか。」と聞く。番人は一寸だまつて居たが、「あれは鉦ぢやありません。鳥です。あれが名高い佛法僧といふ鳥です。」といふ。

鉦の音かと思つてゐたのが鳥の鳴聲であつたのは意外であつた。殊にそれを聞かうがために來た佛法僧であつたのは愈〻意外であつた。「あれが佛法僧ですか。」といつたまゝ、暫く無言で二人とも耳を傾けた。やはりかん〳〵かん〳〵と鉦の音のやうな響に聞える。唯さう思つて耳を澄ますと、かんと響く前にぶつといふ低い音が聞える。ぶつと低く響いてから、かんと高い

冴えた聲が響く。詰りぶつかんぶつかんと鳴いてゐるやうに聞える。多くの書物には文字通り佛法僧と鳴くとあるが、雨月物語には佛法といふ字に態々「ぶつぱん」と假名が振つてあつて、ぶつぱんぶつぱんと鳴くと書いてあつたやうに記憶する。實際の鳴聲はぶつかんぶつかんと聞えるが、先づ雨月物語のぶつぱんに近い樣だ。妙なもので、初めは鉦の音と信じてゐたのが、鳥の聲と聞いてからは正しく鳥の聲らしく聞えて來た。非常によい音だ。初め鉦の音と聞いた時も嘗て法隆寺で聞いた金鈴の響を聯想したが、これが生き物の喉から出



佛法僧

る聲だと知つてから、其の金鈴の響に潤のある事に氣がつく。番人が「大概夜中の二時か三時頃にならんと鳴かんのに、今晩は宵の口から頻に鳴いて居た。」と云ふ。さういふ内も絶えずぶつかんぶつかんと聞える。普通の鳥とは餘程違つて居る。法の御山の靈鳥として恥づかしからぬ不思議の鳥だ。古來幾多の詩歌が之をもてはやしたのも尤だ。私は嘗て、高野の山の靈山であることは奥の院道の杉の大木で證據立てられるといつたが、否々杉は、獨り此の佛法僧によつて證據立てられるといつてよい。見ると遙か彼方の緣に置かれた提燈の燈も、今は靜かにともつて居る。

番人は寂しい燈籠堂の夜陰に偶〻話相手を得たので問ひもせぬのにいろ〳〵話をする。どの話も耳新しく面白かつたが、なか

にも此の燈籠堂で焚く油は夥しい事で、月に一石から二石の間を往來して居る。殊に三月二十一日の御影供の時は一日に一石の油を焚くといふ事と貧の一燈の燈は信者の所望によつて線香に移してやる、それを遙かに北海道や九州あたりまで持つて歸る、中には途中で、消えたといふので、大阪あたりから又引返して來る人もあるといふ事などは面白かつた。

ふと氣がつくと佛法僧はいつの間にやら鳴かぬやうになつてゐた。唯野衾が時々荒膽をひしぐやうな鳴聲をする。歸途につく。

御廟の橋にかゝつた時、友が「また鳴く。」といふ。向ふの墓原を縫ふやうに提燈が一つ來る。女が三人、男が一人「南無大師遍照金剛」と唱へつゝ水向地藏の前を通る。（十五代將軍）

御影供
弘法大師畫像を祭る日
舊暦三月二十一日

近松半二
大阪の淨瑠璃作者

天明三年（一七八三）歿
年九十九
補陀落
印度の南にある海島
Potalaka 觀世音菩薩の住處といふ
那智のお山
和歌山縣紀州熊野の那智觀音堂
補陀落寺
西國順禮三十三番札所の第一番
きみゐ寺
同縣海草郡紀三井寺村金剛寺
西國順禮の第二番札所
順禮
西國三十三箇所を巡りて禮拜するもの
三十三ケ所は紀伊和泉大和山城丹波丹後近江美濃に跨る何れも觀音の靈場

一六　順禮唄

近松半二

「補陀落や岸打つ浪は三熊野の那智のお山にひゞく瀧つ瀨。」年印度の普陀はやう〳〵とほゞの觀世音菩薩の道をかけたる笈摺に「同行二人。」と記せしは、一人は大悲の蔭頼む、「故郷を遙々こゝにきみゐ寺、花の都も近くなるらん。」「順禮に御報謝。」といふも優しき國訛。「てもしをらしい順禮衆。どれ〳〵報謝進ぜう。」と、盆にしらげの志。「あいあい、有難うございます。」といふ物越から裾はづれ、可愛らしい娘の子。「定めて連衆は親御達。國は何處。」と尋ねられ、「あい、國は阿波の德島でござります。」「んう、何ぢや、德島。さつても、それはまあ懷かしい。わしが生まれも阿波の德島。そして、父樣・母樣と一緒に順禮さんすのか。」「いえ〳〵其の父樣や母樣に逢ひたさ故、

それでわし一人西國するのでござります。」と聞いて、どうやら氣に懸る。お弓は尙も傍に寄り、「んう、父樣や母樣に逢ひたさに西國するとは、どうした譯ぢや。それが聞きたい。まあ、其の親達の名は何といふぞいの。」「あい、どうした譯ぢや知らぬが、三つの年に、父樣や母樣も、わしを祖母樣に預けて、何處へやら往かしやんしたげな。それで、私は祖母樣の世話になつて居たけれど、どうぞ父樣や母樣に逢ひたい、顏が見たい。それで、方々尋ねて歩くのでござります。父樣の名は阿波の十郎兵衞、母樣はお弓と申します。」と聞いて惚り、お弓は取附き、これ〳〵、あの父樣は十郎兵衞、母樣はお弓、三つの歳別れて、祖母樣に育てられて居た。とは疑もない我が娘、と見れば見る程幼顏、見覺のある額の黑子。「やれ我が子か、懷かしや。」と、いはんとせしが、いや待て、しばし。夫

取らるゝ命
阿波の德島の城主玉木家の重寶國次の刀の紛失したがもとで

婦は今にも取らるゝ命、固より覺悟の身なれども、親子といはゞ、此の子にまでどんな憂き目が懸らうやら。それを思へば、なまなかに名乘だてして、憂き目を見んより、名のらで此の子の儘還すのが、却て此の子の爲ならんと、心を靜め、よそ〳〵しく、おお、それはまあ〳〵、年は行かぬに、遙々の處をよう尋ねに出さしやつたのう。其の親達が聞いてなら、嘸嬉しうて嬉しうて、飛立つやうにあらうが、儘ならぬが世の憂き節、身にも命にも代へて、かは

順禮阿波鳴門（劇）

いゝ子を振棄てゝ、國を立退く親御の心、よく〳〵の事であらう程に、むごい親と必ず〳〵恨まぬがよいぞや、」「いえ〳〵、勿體ない。何の恨みませう。恨むる事はないけれども、小さい時別れたれば、父様や母様の顔も覺えず、餘所の子供衆が、母様に髪結うて貰うたり、夜は抱かれて寢やしやんすを見ると、わしも母様があるなら、あの様に髪結うて貰はうものと羨ましうござんす。どうぞ早う尋ねて逢ひたい。ひよつと逢はれまいかと思へば、それが悲しうござんす。」と泣いじやくりするいぢらしさ。

母は心も消え入る思。「扨も〳〵世の中に、親となり子と生まる程深い緣はなけれども、親が死んだり、子が先立つたり、思ふやうにならぬが浮世。此方どれほど尋ねても、顔も處も知らぬ親達。逢はれぬ時は詮ない事。もう尋ねずと、國へ往んだがよい

はいの。」「いえ〳〵、戀しい父様・母様。たとひ何時まで懸つてなと、尋ねうと思ふけれど、悲しい事は一人旅ぢやてゝ、何處の宿でも泊めてはくれず。野に寢たり、山に寢たり、人の軒の下に寢ては擲かれたり、こはい事や悲しい事。父様や母様と一緒に居たりや、こんな目には逢ふまいものを。どこにどうして居やしやんすぞ。逢ひたい事ぢや。逢ひたい。」と、わつと泣出す娘より、見る母親は堪りかね、「おゝ、道理ぢや、かはいや、いぢらしや。」と我を忘れて抱き附き、前後正體なげきしが、是程親を慕ふを、何と此の儘往なされう。いつそ打明け、名乘らうか。いや〳〵、それでは、此の子も同じ罪。其の時の悲しさを思ひ廻せば、往なすが爲と、「お、段々の樣子を聞き、吾が身の樣に思はれて、悲しいとも、情ないとも、言ふに言はれぬ事ながら、とかく命が物種、まめでさへ居り

や、また逢はれまいものでもない。これ、しつけぬ旅に身を痛め、煩でも出りや、わるい。何處を證據に尋ねうより、其の祖母樣の方へ往んで居るとの、追つつけ父樣や母樣が逢ひにいてぢや程に、悪い事は言はぬ、思ひ直してこれからすぐに國へ往んで、隨分まめで、親達の尋ねて行かしやるのを待つて居るのがよいぞや。」と宥め賺せば、聽分けて、「あい〳〵、忝うございます。お前が其の樣に言うて、泣いて下さりますによつて、どうやら母樣の樣に思はれて、わしや此處が往にとむない。どんな事なと致しませう程に、申しお家樣、お前のお側に、いつまでもわたしを置いて下さりませ。」「えゝ、悲しい事言出して、又泣かすのかいの。先にから わしも子の樣に思うて、こゝに置きたい、往なしとむないと樣々思ひ廻せども、こゝに置いてはどうも爲にならぬ事が有るにつて、それでつれなら往なすのぢや程に、聽分けて往んだがよいぞや。」といひつゝ、内へはり箱の底を探して、豆板のまめを悦ぶ餞別と、紙に包んで持つて出で、「これ、なんぼ一人旅でも、たんと錢さへやりや泊める。僅かなれども、志、此の銀を路銀にして、早う國へ往にや。必ず〳〵わづらうてばしたもんな。」と銀を渡せば、押戻し、「嬉しうございんすれど、銀は小判といふ物をたんと持つて居ります。そんなりや、もう參じます。忝うございます。」と泣く泣く立つを引留め、「それはさうでも、これは私が志。」と無理に持たして、塵打拂ひ、「これ、もう往にやるか。名殘が惜しい。別れとむない。これ、今一度顔を。」と引寄せて、見れば見る程胸迫り、離れがたなき憂き思。それと知らねど、誠の血筋。名殘惜しげに振返り、「どこをどうして尋ねたら、父樣や母樣に逢はれることぞ。逢は

豆板　小粒の銀貨

粉川寺　西國順禮第三番の札所　和歌山縣紀伊國那賀郡粉川町施音寺
永田秀次郎　貴族院議員　東京市長　號は青嵐　明治九年兵庫縣洲本町生
ハバロフスク　Khabarovsk　ウスリー江の黒龍江に會する處
ブラゴヴェシチェンスク　Blagovestchensk

してたべ、南無大悲の觀音樣。『父母のめぐみも深き粉川寺、佛のすゝめ誓たのもしきかな』。泣く〳〵別れ行く……。（傾城阿波鳴門）

一七　繪はがきだより

永田秀次郎

天の川

汽車は黒龍江の上流に向つてひた走りに走つて行く。ハバロフスクを過ぎて約十九時間、午後三時頃にブラゴウェシチェンスク附近を通過した。

これから先は折々山のやうな岡のやうな處が多くなつて來る。午後九時頃ある山手の驛に着いた時に、白樺の幹が白々と立つ高原の空に、澄みきつた銀河が流れてゐる。

日本人が天の川といへば支那人は銀漢といひ、英人はミルキー、ウェーと呼ぶ。しかし乳の道といふよりは銀の河といふ方が趣がある。名前はともかく、東京で見るよりも遙かに澄みきつて居る。

ミルキー、ウェー　Milky-way

白樺の空に色濃し天の川

ヴェニス　Venice

ヴェニスは十五世紀の頃は世界の通商の中心地として地中海を支配したが、今日は人口五十萬の一市として古き寺院や古き家屋などに昔の名殘を留めて、懷古の情に堪へない、ものがある。僕はまづ有名なピアサ、サン、マルコの廣場へ行つて見た。これを圍むゴシック式の高い建物は、全部大理石であつて、今は階下がカフェーや賣店になつて居る。八時半から音樂が始るといふので、一旦ホテルに歸つて更

ピアサ、サン、マルコ　Piazza of St. mark
ゴシック　Gothic

ゴンドラ　舳と艫の高く擧り底の平たい小舟　Gondola

セントゼームス、パーク　St. James Park

トーチー　Enrico Toci

に八時前から又出かけた。折から眞圓い月がこの水の都を隈なく照らして、空は鏡の如くさえ渡つて居る。僕は更に寺の東の廣場に沿うて海岸に出た。

ゴンドラの月に躍れるへさきかな

散歩して居て如何にも氣持のよいのは、自動車のない事である。夜更けて宿に歸つて來た、寢臺には白いレースの蚊帳を張つてある。僕は八月に日本を出發してから、蚊帳を見るのは今夜が始めてゞある。

煤けぬ月

ロンドンの家屋は古びたものが多い。比較的新しいものでも何となく煤けて居る。其の古い物の煤け方と言へば、まるで眞黑である。如何にも保守的の氣分が見える。

ゴンドラとスミェヴ

鈴木文史朗
本名は文四郎
新聞記者
世界大戰
大正三年から同九年に亙つた歐洲大戰

ベッカストリニ Beccastrini
伊太利の勇士
四年間坑道作業に從事し爆裂作業で負傷して兩眼をつぶし左腕を失ひ只右手の二本指でタイプライターを打つた

リッツォ Rizzo
海軍中佐
オーストリヤの軍艦を水雷で撃破した勇士

或夜セント、ゼームス、パークを散歩して居ると、宛も中秋の明月が森の上に浮かんで出たのを見た。流石のロンドンでも明月だけは煤けて居なかつた。（高所より見る）

一八　トーチー

鈴木文史朗

世界大戰後伊太利へ往つて、繪葉書屋などを覗いた者は、一本脚の兵士が松葉杖を敵兵目がけて投げながら敵の塹壕の中へ飛びこんでゆく繪を時々見たに相違ない。これがベッカストリニやリッツォ中佐と共に、戰爭が生んだ新しい伊太利の勇士としてその名をうたはれたエンリコ、トーチーである。ローマの市のあらんかぎり、彼の名は伊太利國民の間に傳はるであらう。現在彼の父母の住むローマの町はづれの町は、彼の名をとつて

ローマ Roma イタリーの首府
ナポリ Napoli 又ネープルス イタリー西南部の大都會

ヴィア、エンリコ、トーチーと呼ばれてゐる。

トーチーはナポリの貧家に生まれた。十四歳にして海軍の志願兵となり、軍艦の機關部に勤務してゐるうち、電氣のことを覺えて、どうやらその方の一通りの技士として立つて行けるだけになつた。二十三歳のとき船を下り、兩親と共にローマへ引越して、鐵道の機關士となつて一家の生計を立てゝゐた。或日の出來事であつた。トーチーが機關車を運轉してゐると、突然故障が起つて、車は俄にとまつて了つた。同僚が、あぶないからといつて止めるのも聽かず、トーチーは機關車の下へ這ひこんで修理をしてゐたところが、車は急に廻轉し出して、無慚にも彼が片脚を轢きちぎつてしまつた。鐵道省は彼に年金と社宅とを與へた。

スダン Sudan アフリカの中部を占める廣い地方
タイバー河 R. Tiber イタリーの大河 ローマを貫流してゐる

彼はこの大怪我で機關士としてはもう立てなくなつたので、指物屋になつた。しかしその元氣は少しも衰へなかつた。やがて、一本脚のトーチーは自轉車及び水泳の名手になりすました。自轉車ではヨーロッパの周遊を企て、その手初めにアフリカを横斷してスダンまで往つた。水泳では、タイバー河へ飛びこんで、溺れかゝつた小兒を救ひあげるといふ奇功を立てた。それは丁度或日の大雨の後であつた。不斷でもあまり澄んでゐないあの川は、出水のため濁流が煮えくりかへるやうに渦卷きながら、箭の如くに流れてゐた。物見高いは何處の國も同じこと、たゞこの光景を見る人間で、川の兩岸は眞黑になつてゐた。が、その溺れてゴム毬の如く押流されて行く子供を誰あつて救助しようとするものなく、群衆はたゞ「あれよ〳〵」と悲鳴に近い聲

コロシアム Colosseum ローマの圓形大演技場

ネロ皇帝 Nero Domitius (27—68)

を揚げるばかりであつた。これを見たトーチーは、松葉杖を傍に投捨てるが早いか、身を躍らして飛びこんだ。その命がけの行爲は古ローマ帝國の勇士等がコロシアムでネロ皇帝の上覽に供した如何なる武藝にもまさる英雄的のものであつたと、今に市民の語草に遺つてゐる。

開戰となるや、彼は直ちに從軍を志願した。徵兵官はあきれて、「一本脚が出ずとも、二本脚だけで十分だ。」と半ば嘲笑的にはねつけた。しかし彼の愛國心はその位の冷水でさまさるべくもない。追つかけ引つかけ、時を變へ場所を變へて志願した。四度目には、たうとう戰爭狂と見なされて警察の手へまはされ、兩親までも呼出されて、さんざんに說諭をくはされた。

この事あつて以來快活なトーチーは全く沈んで了つた。其の

グランド、キャナル Grand Canal ヴェニス市の中にある運河

頃伊太利の陸戰は非常な悲境に立つてゐた。北方の水都ヴェニスは一時危いとまで傳へられ、勝誇れる墺太利軍の先鋒の一部は、奪ひ取つたゴンドラへ機關銃を据附けてグランド、キャナルへ侵入して來たとさへ取沙汰された。この伊太利の國家が明日をも知らぬといふときに、さうして自分の朋輩といふ朋輩は、最愛の妻も子も親もすべて犧牲にして戰場に走つてゐるときに、鐵道省の恩金で只安穩に暮してゆくことは、溢れんばかりの熱情を持つた彼には、何よりも腑甲斐なく、堪へがたいことであつた。彼には老いたる兩親はあつたが、妻子はなかつた。彼が命をも喜んで捧げ得る唯一の相手は、彼の若々しい腦裏に描かれてゐる美しい伊太利であつた。彼の持つて生まれた熱情が、愛國心に唯一の出口を見出したともいへよう。

何か堅く決心したものと見える、一日トーチーは、手にしてゐた指物の仕事道具を捨てるやうにして仕事場から立上つた。さうして最愛の自轉車に乘つて、飄然として北方の戰場さして家を出た。ローマからヴェニスまでは汽車でゆき、ヴェニスからは自轉車でチヴィターレへと向つた。

チヴィターレ Civitale

アオスト親王 Aosto

アオスト親王

チヴィターレは當時伊太利陸軍中、最も惡戰苦闘を續けてゐたアオスト親王の率ゐる第三軍司令部の所在地であつた。第三軍司令官アオスト親王は伊太利皇帝の從弟で、英邁果斷に加ふるに、現伊太利皇室一家の特性たる純眞な民主的の性格を以て知

られてゐた。親王は乘馬がおすきで、毎日未明に起床して、一人或朝、例により馬を走らせて、市の郊外にさしかゝると、鈴懸の樹陰から一人の男がころげ出るやうにして立現れ、馬の行手の地べたへ倒れざまに坐つたまゝ「殿下にお願がございます。」と叫んだ。其の聲はむしろ泣聲に近かつた。驚いて首をふりあげた馬を制しつゝ、アオスト親王は上からじつと其の男を見つめた。見れば一本脚の不具者で、三十にはまだ遠いらしい。健康そのものゝやうな顏には、思ひ迫つた感情が溢れて、頰には涙が流れてゐる。青年は更に叫んだ。

「私は從軍志願の者です。陸軍省は私が不具者だからとて、それを許しません。しかし私は二本脚の者よりも働ける自信

があります。私を從軍させて下さい。殿下は陛下の從弟であらせられます。殿下のほかには私の望をかなへて下さる方はありません。私の愛國心には、つゆいつはりはありません。」

親王は初めの中は、この男ふざけてゐるのかと思はれたが、彼のいはゆる嘆願を聽きをへるかをへないうちに、馬上からひらりと下りて彼を扶け起し、その兩手を固く自分の兩手に握りしめながら、

「あなたのやうな青年が一人でもゐる間は伊太利は大丈夫です。あなたの願はよくわかりました。が、一存にはいかないから、當事者と相談して、今日といはず午前中にも決定するやうにしませう。」

親王は傍に落ちてゐた杖を拾ひあげて彼に渡し、幾度か馬上から振りかへりつゝそこを立去つた。

うまでして、エンリコ、トーチーは陸軍の一兵卒となつた。さうして彼の入つた隊は、歐洲諸國の陸軍中で有名な狙擊隊であつた。この隊は歩兵にも砲兵にも屬しない特殊隊で、一樣に精巧な狙擊銃を肩にかけて自轉車に乘り、隼の如くに戰場を去來する慓悍な動作で威名を轟かしてゐた。伊太利の觀兵式の時にも、この隊ばかりは突擊の分列式に加る特權をもつてゐる位であつた。

自轉車でアフリカの沙漠までも横斷した事のあるトーチーには、自轉車隊ともいふべきこの狙擊隊は、全く打つて附けのものであつた。隊中、自轉車に乘る伎倆にかけては彼に肩を比べる

lens レンズ

者がなかつた。普通の人には、歩行すら困難な場所を、彼は平氣で自轉車を走らせた。自轉車は彼の失つた一脚に代つて動いてゐるものゝ如くであつた。彼が入隊後幾ばくもなく、隊中の模範となり、誇となるに至つたことは改めて説明するまでもあるまい。狙撃隊ばかりか、第三軍を通じて、兵士等がわれと我が勇氣を振ひ起さうとする時には、皆口々に言つた「――一本脚のトーチーさへも……」と。

抜擢されて彼は狙撃隊の傳令となつた。砲煙彈雨の中を冒して、でこぼこの戰場を西に東に、岩乘造りの重い自轉車を片脚で踏みしめ〳〵背を圓くして走る彼の姿を見たばかりで、隊中の士氣は忽ちに振ひ立つた。任務に出た彼の歸りが遲いのを氣遣ふ指揮官の雙眼鏡のレンズに、破損した自轉車を背負つて、有

アドリヤ海 Adriatic Sea　イタリーの東方にある海
イソンゾ川 R. Isonzo　トリエストの近くの小川
モン、ファルコーネ Mon Falcone

合ふ木の枝を杖に、一所懸命ひた走りに走つて來るばつた蟲のやうな彼の姿が映つた時、嚴肅な氣に打たれて、思はず脫帽して胸に十字を切つたとは、指揮官自身の物語である。

やがてトーチーの死すべき時は來た。一千九百十六年の夏、伊太利の附け根ともいふべき北部國境の南を流れてアドリヤ海に注ぐイソンゾ川の畔に於ける伊太利軍第五回總攻撃は始つた。このイソンゾ川の戰は、敵・味方にとつて、全局の勝負をも決すべき戰であつた。トーチーは此の時、モン、ファルコーネ――鷹の山――附近の戰線に立つてゐた。モン、ファルコーネはイソンゾ川を隔てゝアドリヤ海の囊の底に立ち、いはゞ墺伊戰線の基點で、イソンゾ川の臍である。敵・味方ともこの山の戰に主力を傾けたのはそれがためだ。

伊太利軍砲兵隊は八月三日悉く陣地につき、こゝに攻撃準備は完結して、全軍武者振ひしつゝ命令一下を待つた。第一の命令は下つて、右翼モン、ファルコーネ東北の高地に對し、翌くる四日から猛烈な攻撃は開始された。トーチーはこの攻撃隊の中にゐた。この戰闘は伊太利軍第一の難戰苦闘であつた。兩軍とも死力を竭して攻守した。血と砲彈と肉と劍戟と擲彈とは、空・地面・地の底までも滿たすやうに飛びかうた。しかも第一日の戰には、敵・味方とも一寸の地點をも變じない。砲撃や射撃の戰ではもうなくなつた。野戰の最後の決戰たる突貫戰、――然り、其の方面の全軍を擧げての突貫戰を、翌日を期して決行するより他に術はなかつた。この命令が傳はつた時、トーチーはその突貫隊の第一列に入ることを志願した。しかしこの突貫ばかりは自轉車ではやれないので、斷られようとすると、彼は松葉杖を脇の下にあてゝ、このやうに立派に走れると、鳥の如く疾走して見せた。

Riviera リヴィラ

この伊太利陸軍の肉彈戰ともいふべき總攻撃の第二日はほのぼのと明けて、燃えあがるやうなリヴィラの八月の日は、淺ましい人間爭闘の野を照らした。突撃・退却・驀進、一寸の陣地も一日の中に幾度か互に奪取しあつた。勝負は中々決しやうがなかつた。十數度の攻撃に次ぐ攻撃の後、最後の――愈・眞の最後の突貫が伊軍によつて試みられた。此の決死隊の眞先に、而も數歩前に立つて、たゞ一人エンリコ、トーチーは右腕に例の松葉杖を抱へ、左手に擲彈をつかんで、敵の塹壕目がけて進んで行つた。後から續く全軍はこれを見て一齊に叫んだ、「一本脚のトーチー

さへも。」と。雨といふよりも暴風のやうに飛來る彈丸の間を、彼は文字通り敵の塹壕のきはまで突貫した。さうして其の身につけてゐるだけの擲彈をその中の敵兵に投げつけた。その時、敵の一彈がトーチーの胸部に命中した。と、彼は最後の一瞬に渾身の力をこめて、松葉杖を塹壕中の敵兵目がけて投げつけ、やがて斃れんとする身體を其の松葉杖の落ちた上へと投げつけた。かくのごとくにして、エンリコ、トーチーは死んだ。トーチーの最期が伊太利全軍の士氣を振興させたことは實に

トーチーの銅像

偉大なものであつた。それがため、彼の戰死後二箇月とたゝぬ一千九百十六年九月二十日、伊太利の最上軍功勳章たる黃金章が、彼の靈前へ飾られた。そして彼の老父母の住んでゐるその官舍の前で盛大な町名命名式が行はれた。ローマのボルゲーゼ公園には、彼が最後の松葉杖を投ぜんとする姿の銅像が建てられてある。（東西話行）

一九　本居翁の遺蹟

芳賀矢一

松・杉・椎などで小暗い路を四五町も上つた處に淨土宗の寺があ る。妙樂寺といつて、本居翁には深い關係のある寺である。それから右へ左への九十九折を喘ぎ〳〵六七町も上ると古い木の鳥居が有つて、十數段の石磴の上二三十坪位が平地になつて

ボルゲーゼ
Borgese

本居翁
宣長
國學四大人の一人
鈴の屋と號す
伊勢松坂生
享和元年（一八〇一）
薨
年七十二

芳賀矢一
國文學者
東京帝國大學名譽教授
國學院大學長
帝國學士院會員
文學博士
越前福井生
昭和二年薨
年六十一

妙樂寺　三重縣伊勢國飯南郡花岡村大字山室にある松坂町の西南四粁餘

平田篤胤　國學四大人の一　仏吹舎と號す　出羽秋田生　天保十四年(一八四三)卒　年六十八

居る。其の中央の小高い土盛が卽ち翁の墓である。上に櫻の樹が一本。「本居宣長之奥墓」と題した墓石がある。翁の墓の左手には、平田篤胤大人の

なきがらはいづくの土になりぬとも魂はおきなのもとにゆかなん

といふ歌を鐫りつけた圓い石が建てゝある。篤胤大人は翁の歿後の門人で、生前に教を受けられたことは無い、而も數多の門弟子の中で獨り翁の側に侍つて居られるのは、大人にとつては嘸かし滿足の事であらうと思ふ。此の墓所はかの妙樂寺の所有地であつたのを翁が懇請して、生前に選定して置かれたのである。其の承諾を喜んで、住僧に贈られた手紙は今尙同寺に珍藏して居る。

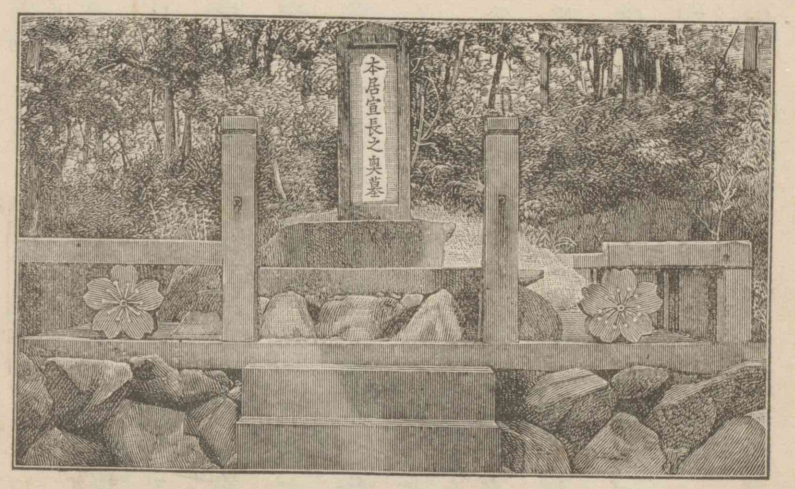
山室に千年の春のやどしめて風に知られぬ花をこそ見

と詠まれたのは此の時である。二十年來一日として翁の書物を讀まぬ事の無い後進の一書生が、今始めて翁の墓前に額づいたのだから、感慨は眞に無量であつた。

百年の世はへだつれど教へ子に數まへませとをがみ額づく

翁が歿後の門人は幾百萬の多きに上つて居るのであらう、其の著書の卓絶な學術上の價値と偉大な感化力とは、未來永劫に歿後の門人を作りつゝあるのである。世に學者の事業程大いなるものはない。

此の墓所は山の頂にあるので、眺望の美しさは比類がない。青



本居宣長の奥墓

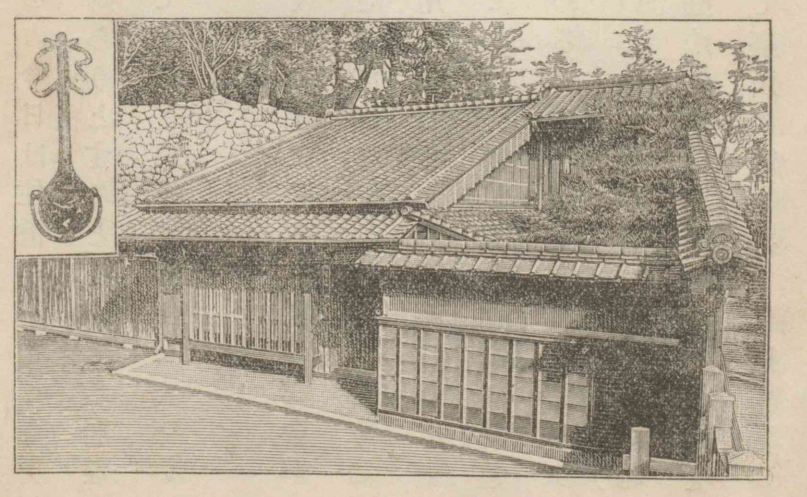
青とした伊勢の海を見はるかして、志摩・三河・尾張等の崎々山山、近くは松坂の町を眼下に見る。「富士の山もいつもは丁度あのあたりに見える。」と案内の男は指さした。千古に卓越した學者の奥津城として、誠にふさはしい場所である。

妙樂寺に入つて一憩し、翁の書幅を拜し、參拜名簿に記入などする。此處の眺望も誠に美しい。元來本居家の檀那寺で、翁

も折々此處に來られた事がある。今日は住僧が不在で、寺男が一人留守居をして居たが、いざ歸らうとすると、その男も居ない。車夫に聞けば、今在所まで往つて來るといつて出掛けたといふ。さながらに太古の民である。

松坂へ歸つて、城跡の公園に行く。こゝに鈴屋遺蹟保存會があつて、翁の舊宅が其の儘に保存されて居る。又新しい倉庫には翁の自筆の草稿、遺愛の品、醫業用の藥箱なども陳列されて居る。どの稿本も丁寧に綺麗に認めてあつて、翁が四十餘年の勤勉篤學人をして覺えず襟を正さしめる。舊宅はもと魚町にあつたのを、市中は火災の虞があるといふので、保存會でこの舊城址の一角へ移したのである。併し庭の樹木、置石まで一切舊態を存するやう苦心したといふことで、臺所の竈も井も便所も舊の儘

の形に殘つて居る。下が引出になつて居る小さい梯子段を上ると、二階が四疊半の書齋、その床の柱に三十六の鈴が六つづつ六段に繫がれて懸つて居る。尤もこれは模造品で、本品は陳列庫に在る。さてもこの書齋こそ翁が一切の著述の製作せられた場所で、此の四疊半から日本全國を吹靡かす風が舞起つたのである。西向の窓からさし込む夕日は嘸堪へ難



本居宣長舊宅鈴屋及び遺愛の鈴

ワイマール　ゲーテやシルレルの住つてゐた地　獨逸のアゼンスといはれる　Weimar

ゲーテ　獨逸の詩人戲曲家評論家　Goethe (1749—1832)

シルレル　獨逸の詩人戲曲家歷史家　Schiller (1751—1705)

パノラマ　Panorama

山室山神社　本居宣長を祭る

かつたらうと思はれて、此の質素な家居の樣が愈〻翁の人格を大ならしめる。獨逸のワイマールでゲーテやシルレルの舊宅を見た時にも、其の偉大な事業と其の質樸な家居の有樣との對比を面白く感じたが、此の鈴屋の遺蹟には一層感を深うした。此の公園は四望豁然、パノラマを見るやうであるが、翁の遺蹟を移して更に崇高の趣を加へた。我が國に翁あるは我が國の誇である。松坂町民の誇は翁の遺蹟に越したものはあるまい。城の大手門を出て數十歩、縣社山室山神社がある。社殿や瑞籬が神宮風の樣式であるのは一入嬉しく感じた。小春日和の麗かさに、此のあたり櫻が幾本ともなく返り咲をして居る。案内人の話に、先年東鄕大將の來られた時も返り咲を見られて、「流石に本居翁の鄕土だけあつて、櫻は一年中咲くのだらう。」といはれ

たといふことである。（筆のまに〳〵）

二〇　おのが物まなび

本居宣長

おのれ幼かりしほどより、書を讀むことをなんよろづよりも面白く思ひて讀みける。さるはしかくしく師に就きてわざと學問すとにもあらず、何と志すこともなく、そのすぢと定めたるかたもなくて、たゞ漢の日本のくさ〴〵の書をあるにまかせ得るにまかせて古き近きをいはず何くれと讀みけるほどに、十七八なりしほどより歌詠まゝほるにもあらず、人に見することなどもせず、たゞ一人詠み出づるばかりなりき。集どもゝ古き近きこれかれと見て、かたのごとく今の世の詠みざまなりき。

かくて二十餘りなりしほど學問しにとて京になん上りける。さるは十一の年父に後れしにあはせて、江戸にありし家のなりはひをさへに失ひたりしほどにて、母なりし人のおもむけにて、醫師のわざをならひ、又そのために世の常の儒學をもせんとてなりけり。さて京に在りしほどに、百人一首の改觀抄を人に借りて見て始めて契沖といひし人の說を知り、その世にすぐれたるほどをも知りて、此の人の著したるもの、餘材抄・勢語臆斷などを始め其の外もつぎ〳〵に求め出でて見けるほどに、すべて歌學のすぢの善き惡しきけぢめをもやう〳〵に辨へさとりつ。

宣長の長男　春庭

三五　明和元年　古事紀傳　玉鉾

三六　明和八年　國歌八論

四三才（八年）　江戸にありし家

四三才　直毘靈　江戸大傳馬町の木綿問屋

四三才（安永元年）　細辯　百人一首改觀抄　五卷

四四　僧契沖の著　百人一首の註釋

四五才（八年）　四十三人の歌　契沖　江戸前期の國學者

五四才（八年）　万葉集　大阪圓珠庵の僧　元祿十四年（三六一）寂　年六十二

五三才（天明元年）　言葉の玉緒

五七才（六年）　餘材抄　二十卷　くはしくは古今餘材抄

五七才　古事傳　古今集の註釋

六二才（寛政三年）　勢語臆斷　二十首　五卷　伊勢物語の註釋

六三才　新古今集美濃家苞

六三才　古事傳　中卷の完了

六四才　玉勝間　書き始めた。

六六　大祓詞後釋

六七　

六九　古事傳　鈴屋文集　七十才　國學に關する書簡　朝鮮語解　宣命

三〇　おのが物まなび

六八才　古今集遠鏡

七十二才　死す。

冠辭考
十卷
賀茂眞淵の著
枕詞（冠辞）の語
意を説いたもの

縣居大人
賀茂眞淵翁
江戸濱町の住居
を縣居と名づけ
た
國學四大人の一
人
遠江國濱松生
明和六年（一七四九）
薨
年七十三

さるまゝに、今の世の歌よみの思へるむねは大方心にかなはず、其の歌のさまもをかしからずおぼえけれど、そのかみ同じ心なる友はなかりければ、たゞ世の人なみにこゝかしこの會などにも出で交らひつゝ詠みありきけり。　さて人の詠むふりはおのが心にはかなはざりけれども、おのがたてゝ詠むふりは今の世のふりにも背かねば、人は咎めずぞありける。　そはさるべきことわりあり。　別に言ひてん。

さて後、國に歸りたりしころ、江戸より上りし人の近き頃出でたりとて冠辭考といふものを見せたるにぞ、縣居大人の御名をも始めて知りける。　かくてその書、初めに一わたり見しには、更に思ひも懸けぬ事のみにして、餘り事遠くあやしきやうにおぼえて、さらに信ずる心はあらざりしかど、猶あるやうあるべしと思ひて立ちかへり今一たび見れば、まれ〳〵にはげにさもやとおぼゆるふしぶしも出できければ、又立ちかへり見るに、いよ〳〵げにとおぼゆること多くなりて、見るたびに信ずる心の出で來つゝつひに古ぶりのこゝろことばのまことに然ることを曉りぬ。　かくて後に思ひ比ぶれば、かの契沖が萬葉の説はなほ未だしきことのみぞ多かりける。　おのが歌學のありしやう、大方かくのごとくなりき。

さて又道の學は、まづ初めより神書といふすぢのもの、古き近きこれやかれやと讀みつるを、二十ばかりのほどよりわきて志ありしかど、取立てゝわざと學ぶことはなかりしに、京に上りてはわざとも學ばんと志は進みぬるを、かの契沖が歌書の説になずらへて皇國の古の意を思ふに、世の神道者といふものゝ説く趣

は、みないたく違へりと早く悟りぬれば、師と頼むべき人もなかりしほどに、「われいかで古の眞の旨を考へ出でん」と思ふ志深かりしにあはせて、かの冠辭考を得てかへすがへす讀みあぢはふほどに、いよいよ志深くなりつゝこの大人を慕ふ心日にそへてせちなりしに、一年この大人田安の殿の仰言を承り給ひて、此の伊勢の國より大和・山城などこゝかしこと尋ねめぐられし事のありしをり、此の松坂の里にも二日三日留り給へりしを、さる事つゆ知らで、後に聞きていみじく口惜しかりしを、歸るさまにも又一夜宿り給へるをうかゞひ待ちて、いとく嬉しく、急ぎやどりにまうでて始めて見え奉りたりき。さてつひに名簿を奉りて教をうけたまはることにはなりたりきかし。

（本居宣長全集——玉勝間）

田安の殿　田安中納言德川宗武　德川吉宗の第三子　眞淵は田安家に仕へて居た

松坂　伊勢國松坂町　宣長の生まれた處

名簿　中古貴人に謁見し又は師家に入門する時などその證として我が名を書きて奉るもの

二　臨終の平田篤胤

五十嵐力
國文學者
早稲田大學文學部長
文學博士
明治七年山形縣米澤市生

秋田市の千秋公園に平田神社といふ檜造りの立派な社がある。秋田に生まれ、秋田で死んだ幕末の偉大なる國學者平田篤胤を祀つた社である。篤胤は秋田の最大なる誇の一つとされて居る偉人であるが、彼は決して小さい一鄉・一國の誇とすべき人ではない。

篤胤は本居宣長の歿後の門人で、賀茂眞淵及び宣長と相並んで、江戸時代に於ける國學界の三大偉人の一人と稱せられる人である。彼は不幸な家庭に人となり、若くして鄉里を飛出した。

平田篤胤

平田篤穩
通稱は藤兵衛
山鹿流の兵學者

太宰純
江戸前期の儒者
春臺と號す
荻生徂徠の門人
信濃國飯田生
延享四年(一七四七)
年
年六十八

江戸に出ては、大八車の車力となり、火消の子分となり、つゞいて商家の賄夫となつて、具さに辛苦を嘗めたが、其の間に在つても曾て修學の志を棄てなかつた。其の中に備中松山の城主板倉侯に見出されて、其の藩士平田篤穩の嗣子となつた。それ以來大いに讀書研究の便宜を得て、國學・儒學・佛學・醫學・曆學・天文・物理・數學等、その頃日本に行はれて居た殆どすべての學問を修得した。そして其の上に自分の大いなる神道觀を立て、敬神尊王の大義を天下に布かうとつとめた。彼は二十八歳の時に、太宰純の我が國體を蔑みした論を駁して、「呵妄書」といふ書物を著したが、これを處女作として、六十八歳で病歿するまでに、筆にした著述は凡そ百部千餘卷、弟子の數は二千人に餘つたと云はれる。篤胤は天保十二年の正月、幕府の忌諱に觸れて、江戸を構はれ、五

十年ぶりで秋田の生家に歸つた。けれども彼はこれが爲に少しも落膽することなく、相變らず讀書と著述とに努力して居たが、十四年の夏の頃、圖らず病を獲て、それが段々に重つて行つた。そして九月に入つては、經過がますゝ思はしくなかつたので、彼はもう起ち得ぬと覺悟したのであらう。

思ふこと一つも神につとめをへず今やまかるかあたら
この世を

といふ辭世まで詠んだが、死ぬる前に、かねて心血を注いでゐた書きかけの書物を、是非とも完成しようと決心して、猛然として瀕死の老の身を机に托した。

篤胤は燃ゆるが如き敬神尊王の心を持つて居た。而して不撓不屈の勇猛心と傲岸なる負けじ魂とを以て、其の宣布につとめ

た。此の悲壯なる臨終の執筆は、彼が此の性格の最も著しく現れたものである。

彼は左の肘を机に托して、衰へ切つた身を支へながら、こつ〳〵と書き始めた。彼は壯年の時には、數日間不眠不休に打通して著述の筆を執つたことがある。今や彼は、其の時のやうな勇氣を振ひ起して熱心に書きつゞけたが、其の老齢と重病とはかやうな仕事の安易な繼續を許さなかつた。見よ、窶れ果てた彼の顏には、光澤の無い髮が蓬々と亂れかゝつて、髮が伸び、頰がこけ、眼が物凄く血走つて居るではないか。而して彼は此の疲れ切つた身を叱咤し鞭撻しては、間斷なく筆を動かして居るではないか。彼はかくして二三日を過したが、家人はもう見るに堪へなくなつた。夫人は屢〻諫めた。夫人はもと彼の門下で、彼が鰥寡

ずみの後、彼に嫁いで其の大事業の助成に身を獻げた賢婦人である。

「先生、少し御休みなすつては如何でございます。」

「その樣な無理をしては、どんな丈夫な身體の人でも堪るわけがありません。一晩でもよいから、どうぞ御休みなすつて下さい。せめて一晩でも……」

繰返して願つたが、篤胤は振向きもしなかつた。けれども夫人も必死である。隙を見ては、また

「先生、そんな御無理を……」

と言ひかけると、篤胤は物凄い顏を更に物凄くして、一寸振向いて、たつた一言、

「うるさいつ！」

と叱りつけて、又向き直つては、そのまゝ筆を動かした。

かうして又二日ばかりを過ぎた。篤胤の顏は前よりも更に物凄くなつて來た。家人も今は居ても起つても居られなくなつたが、といつて、どうすることも出來ないので、たゞ見て居て、はらはらするばかりである。その間にも、机の上の草稿は次第に厚さを加へて來た。それを見て、篤胤はやつれた顏に折々寂しい笑みを浮かべながら、懸命に筆を走らせた。

「これを書き了るまでは、決して死なないぞ！」

彼の勇氣は益々加つた。けれども彼の身體は、此の無理な仕事の爲に刻々と衰弱するばかりである。その中に筆を持つ手が顫へ出して、思ふやうに字を書くことすら出來なくなつて來た。

「何を！　これが書き了らぬ中に死ぬものか！」

かうして勇氣を振ひ起し、振ひ起しては書き進む。その間に篤胤の最期は刻々に迫つて來た。けれども著述は、まだ豫定の半分にも達して居ない。

「何を！」

篤胤は幾度此の言葉に、自分を叱咤したことであらう。

衰へ切つた身體にこの不眠不休の仕事が續けられて、もう五日になつたが、今にも危いと見えた篤胤の身體が、不思議にもまだ倒れなかつた。さうして草稿は次第に堆くなつて行つた。

「もう少しだ！」

篤胤は筆を運びながら、心の中で神に祈つた。

「どうぞこの仕事を完成させて下さるやうに！」

筆は取換へられ取換へられて、其の度毎に草稿が貴い堆さを加

へた。家人は、もう何も言はれなくなつた。唯この尊い仕事を續ける篤胤の姿に對して、涙にくれつゝ、手を合はせるばかりである。

或時の事、篤胤は藥湯を運んで來た夫人を顧みて、

「喜べ！　もう僅かになつたぞ！」

といつた。夫人は溢れ出ようとする涙を抑へながら、たゞ一言、

「さやうでございますか。それは……」

といつたきり、後の言葉が續けることが出來なかつた。氣がついて見ると、篤胤の顏はもう生きた人の顏ではない。血の氣は失せ、肉は全く無くなつて、まるで骸骨に皮を張つたやうになつて居る。筆を持つて居る手は、三つ兒の腕よりも細く弱々しくなつて居る。けれどもその眼は、焰のやうに燃えてゐた。

筆を執り始めてから、もう七日である。彼の傍らに積まれた草稿は、机のたけよりも高くなつた。しかし、篤胤はまだ筆を離さずして、夫人が時刻の藥湯を運んで來たのにも氣附かずに、筆を運んで居た。

やがて八日目の朝が來た。夫人が朝の藥湯を運んで行くと、筆を走らせて居る筈の篤胤が、机に寄りかゝつて、筆を握つたまゝ顏を紙の上につけて居る。夫人は、極度の疲れに、暫く休んで居るのであらうと思つて、そつと部屋を出ようとしたが、少し氣になつたので、振返つて、よく見ると、今までは呼吸毎に痛ましく波打つて居た、痩せこけた肩が、ちつとも動いて居ない。はつとして、

「もし、先生！　先生！」

と聲をかけたが何の返事もなかつた。夫人は、もしやの豫感にいよ〳〵胸をときめかして、また

「先生！」

と高く呼びながら、つと寄つて篤胤の顔を起さうとしたが、觸れると同時に、夫人の手はぞつとする樣な氣味の惡い冷たさを感じた。

夫人は「先生」と言つたまゝ、篤胤の身體を抱きしめて咽び泣きに泣いた。やがて記念の筆は夫人の手によつて、靜かに篤胤の手から取離された。それから草稿を見ると、その最後に、書き終へ

篤胤

百八十乃嶋乃波〻めと御祖神のこの世乃國乃〻〻〻
國中乃波〻〻〻神の御舍乃〻〻〻瓊矛乃末乃〻〻〻
志乃玉乃〻〻〻天津神乃御舍乃〻〻〻賜乃〻御志乃〻〻〻玉

篤胤筆蹟

筆蹟　篤胤

百八十の島のはじめと御祖神のかきなし坐る島はこのしま
國中のはしらと
神の御舍たてし
瓊矛のなれる山
はこの山
この玉はその玉
矛に天津神のつけて賜へる御しるしの玉

た年月日と姓名とが立派に書き記してあつた。

篤胤の死を聞きつけて集つて來た人々は、いづれもこの篤胤が絶倫の精神力に舌を捲いた。

「とても人間業ではない。」

人々は感嘆の詞を漏らしながら、暫くこの偉人の尊い亡骸の周圍を凝視したが、やがて一人が、

「あつ！」

と叫んだ。その叫につれて、其の指さす方を見ると、これはまた何といふ無慚な悲壯な光景であらう。見よ、篤胤の臂を托した机の一點が、八日間の壓力に著しく窪んで、しかもそこに赤黑い血がにじんでゐるではないか。更に篤胤の亡骸を見ると、肘の皮がすれ破れて光澤のない肉が食み出して居るではないか。

思ふに、篤胤は道の爲に著述の完成を急ぐ熱心から、我を忘れて臂の皮肉の傷や痛みに氣がつかなかつたのであらう。そして、熱心の著述の完成に、急に氣の張りを弛めて、突然その呼吸を引取つたのであらう。

貴い最後である。實に尊い偉人の最期の光景ではある。

（我が三大國民道）

室生犀星
詩人
小説家
名は照道
明治二十二年金澤市生

二二　冬の感情

室生犀星

照道

洲に雪がつもつた、
枯蘆が折れ込んで埋れてゐる。
水たまりはまんまるい象になり、
沈んだ雪で曇り、
流れてゐる水は暗い色を引いてゐる。
土手の枯木も
田圃の果ても雪につゞいてゐるばかり……
わたしは何も見ない、
たゞこれだけをマントのすき間から見たばかりだ。
折れ込んでゐる蘆は氷りついて
もう既にくされてゐた……

（故郷圖繪集）

マント
フランス語
Manteau
大風呂敷のやうな外套

松平樂翁
江戸後期の賢相
名は定信
田安宗武の子
奥州白河藩主松平定邦の嗣となる
文政十二年（一八二九）歿
年六十二

二三　交友の道

松平樂翁

「友に交はる道は、いかなることか心得べき。」といふに、「友はその所長を友とすべし。古きこと好むには、そのことに友とし、武技好むには、それに友とし、歌よむものには、その道に友とするぞよき。

管鮑の交はり
齊の管仲と鮑叔との親交
管仲は生レ我ハ者父母知レ我ヲハ者鮑叔とまでいつた

知己
士ハ爲ニ知レ己ヲ者ノ死ス（史記）

さるに歌とてもこのふりはあしかり、かれにまねびたまふはひがごとなりなどいふにも及ばじ。たゞ交はりてこそあるべけれ。古にいふ管鮑の交はりといへども、この二人同じ徳、同じ心なりしにもあらずかし。世の中に同じ心の人といふものは、いと稀なる事なるべし。只我が好める方に引入れんとするもうるさし。この人、この所に長じぬれど、こゝはいと短し。その短き所を引きのばへんとするはいと苦し。さ思ふ我もまたその短き所あるものを。殊に思ふこと皆諫めものせんとするを、かの信と思ふはたがへりけり。交はるがうちにも知己の人は、いと稀なるものなり。それらよくことばを求めなばもとよりいふべし。されどしばゝすべきにはあらずかし。浅き契の友なりとても、友といふうちならば、その人のうへの存亡にかゝはるばかりのことならばいふべし。すべてしひてかくせん、かくすくひてん、まげてもと思ふは、みな中道には背けりといはん。たゞその所長を友とすれば、交はりがたき人もなく、われに益なき友もあらじ。かの友によりてわが方の亂れんとするは、皆その短を友とする故なり。」と答へしものありきとや。（花月草紙）

杉浦重剛
教育家
宮内省御用掛
日本中學校長
稱好塾主
近江膳所藩士
大正十三年卒
年七十

穗積陳重
法學者
法學博士
樞密院議長
伊豫宇和島藩生
大正十五年薨
年七十二

二四　杉浦重剛君を弔す

穗積陳重

謹んで杉浦重剛君尊靈に拜告す。

不肖陳重は君の數多き友人の中で、最も古くかつ最も親しく交誼を辱うしたる一人として、推されて友人を代表し、茲に靈柩の前に拜伏して、幽明別離の辭を述ぶべき最も悲しき役目を負ふことになりました。回顧すれば、私が始めて君と相知るに至れ

大學南校　明治二年開成所を改めて大學南校といつた今の東京帝國大學の前身

るは、明治三年、朝廷が諸藩に令して貢進生を徵し、大學南校に入らしめた時でありまして、君は膳所藩の貢進生であり、私は宇和島藩の貢進生であり、殊に年齢を同じうし、學科を同じうした爲でありまして、今を距ること實に五十六年の往時であります。貢進生の年齢は十六歳より二十歳までありましたから、君は當時十六歳の青年で、生徒中最年少者であつたにも拘らず、其の人格の高邁にして、已に自ら成人の風が有り、殊に漢學の素養最も深かりしが爲に、嶄然頭角を見はして、夙に儕輩の推重する所と爲り、慷慨氣節を尙ぶの青年は、同氣相求め、期せずして君を中心とし、校中に一團を爲し、或は言論に、或は文學に、又時としては青年客氣の餘り、誤つて實力に訴へ、只管士氣の振作と校風の廓清とに努めたものであります。　私ども舊友も其の驥尾に附し、

驥尾　顏淵雖ニ篤學一附ニ驥尾一而行益顯。（史記）

牛耳　盟主の意　諸侯盟誰執ニ牛耳一（左傳）

當時君との友交に依つて受けた感化は、私どもの生涯に極めて深き印象を遺したといふことを自覺するものであります。　此の如く君は青年の學生時代に於て、既に儕輩の間に牛耳を執り、身を以て範を示し、氣を以て事を行ひ、至誠人を動かすの素養が有つて、後に育英を以て事業とせらるゝの徵は、すでに當時に現れて居つたのであります。　其の後明治九年に、私どもは君と共に文部省留學生として英國に派遣せられ、留學數年間は、起居を共にしたことが多く

杉浦重剛

蒲柳

蒲柳之姿望レ秋而落、松柏之質經レ霜彌茂。（世說）

ありましたから、君の精神上知識上の感化を受けたことが殊に多くありました。君は蒲柳の質を以て、過度の勉學をせられたために、健康を害せられ、滿期前に歸朝せられましたが、其の後君が畢生の獻身事業とせられた育英のことに對しては、前に述べた君の獨得の性格は、君をして他に比肩者なき適任者たらしめました。其の功績の顯著なるは、素より當然の事であります。併しながら君の育英事業の功績と皇室及び國家・社會に對する勳功とについては、世人の夙に周知する所、又此の式場に於ても他の人々より述べらるゝ所でありますから、茲には之を省きます。只私ども友人はかゝる崇高なる人格者を友とし得たることを畢生の欣幸とするにつけても、之と別るゝを悲しむの情の一層切なるを感ずる次第であります。

今

大正十三年二月十六日葬儀の日

トラファルガル　イスパニヤの西南海岸の岬

Trafalgar　一八〇五年十一月二十一日ネルソンの英國艦隊が佛伊聯合艦隊を破つてナポレオンの英國侵入を挫く

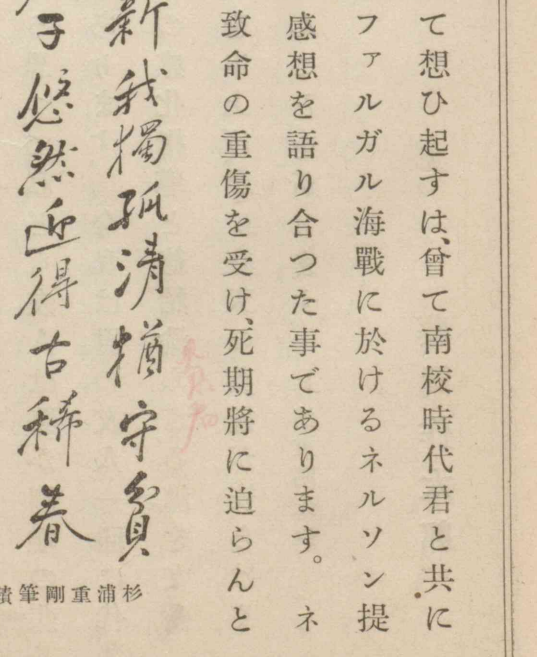
ネルソン　Nelson (1758—1800)　イギリスの水師提督

筆蹟

東風與レ歲一番新、我獨孤清猶守レ貧。賴有二床頭四君子一。悠然迎得古稀春。

甲子新年　口占　天台道士

今君に別を告ぐるに當つて想ひ起すは、曾て南校時代君と共に始めて英國史を學び、トラファルガル海戰に於けるネルソン提督戰死の條を讀んで、共に感想を語り合つた事であります。ネルソン提督は、敵砲の爲に致命の重傷を受け、死期將に迫らんとする刹那、敵の艦隊全滅の報を聞いて、神に謝す、我は我が務を爲せり。」と呼び、莞爾として瞑目した條に至り、感慨無量、君と相語つて「最期の瞬間『我は我が務を爲せり。』と公言して死することを得たるは、人生理想の極致である。」と言ひました。後にも此の事を



杉浦重剛筆蹟

神に謝す

Thank God, I have done my duty.

藤岡作太郎
國文學者
東京帝國大學文科大學助教授
東圃と號す
文學博士
明治四十三年歿
年四十一

想ひ出しては互に話し合つたことがありましたが、今私は君が正に最期の瞬間に於て此の言を發し得た人であつたのを喜ぶものであります。君は事柄こそ違へ、近年或はトラファルガル海戰の如き一大事を考へたこともあらう。又君は重き病床に在つて、必ず「神に謝す、我は我が務を爲せり。」と言ひ、莞爾として永眠に就いたであらう。かう思つて、私ども友人は聊か別離の悲哀を慰むる所ある次第であります。今私は君の友人一同に代り、君の生前に於ける多年の感化指導と終始渝らざる溫き友愛とに對し、最後に厚く御禮を申上げ、君の在天の英靈が安らけく、平らけく、長へに鎭りますことを祈ります。（杉浦重剛先生）

藤岡作太郎

二五　梅

固陰沍寒
其藏レ氷也、深山幽谷固陰沍寒（左傳）

雪肌玉骨
氷肌玉骨清無レ汚、水殿風來暗香滿。（竹坡詩話）

陸凱
三國時代の吳の左丞相

西湖
中華民國の浙江省杭州府錢塘江を遡ること三十二粁のところ

林和靖
宋の隱逸名は逋詩と書に長ず和靖は諡

固陰沍寒、草木なほ凍枯せる時、雪肌玉骨ひとり高く標致するものは梅花にして、菊花の逝く秋に後れて凋むと共に高節遙かに群芳を拔く。牡丹は貴客、梅は隱士。彼は金屏を廻らして七寶の花瓶に挿みて觀るべく、此は茅舍竹籬牛の聲する邊に尋ぬべし。華麗は櫻花に及ばざれども、芳馨は薔薇に比して別に特長あり。冷艶玉を綴つて疎々たり。老幹龍を橫たへて偃蹇たり。清風雅韻百花の魁たるもの、この花を措いて何かある。

支那の文人は酷だ梅花を好めり。三國の末陸凱といへる人これを江北の友に贈つて曰く、

折レ梅逢二驛使一、寄與隴頭人。
江南無レ所レ有、聊贈一枝春。

宋の時、林和靖といへる高士西湖の畔に棲み、梅を植ゑ、鶴を飼へ

り。屢〻舟を湖中に泛べて遊ぶに、客至れば童子鶴を縱つてこれを報ず。その梅を詠じたる句に、

「疎影横斜水清淺、暗香浮動月黄昏。」

といへるは梅花詩中千古の絶唱と稱せらる。

わが國に於ても既に萬葉・古今の歌集に梅花の詠多し。百磯城の大宮人は梅を挿頭して野邊に遊びわが宿の梅咲きたりと告げやれば好事の士は誘はずとも來る。或は闇の夜に「色こそ見えね香やはかくるゝ。」と稱へ、或は昔ながらの花を見て「人はいさ心も知らず。」とあやぶめり。菅原道眞十一歳にして「月燿如晴雪、梅花似照星。」と賦せしが、後年太宰府に左遷せられ、將に家を出でんとして庭前の梅を眺めていはく、

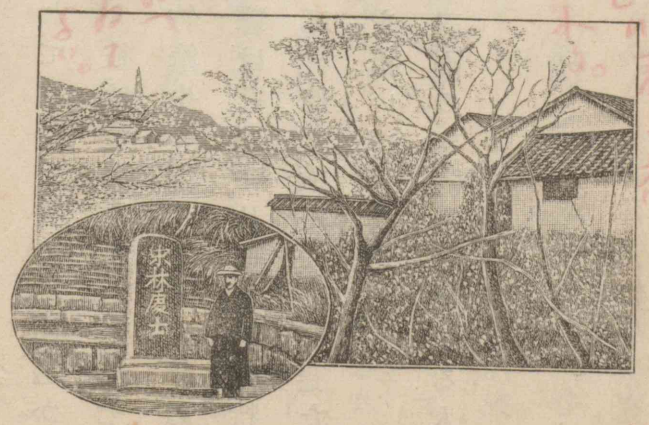
こちふかばにほひおこせよ梅の花あるじなしとて春な忘れそ

藤原公任また幼にして宮中に候して、

しらゝとしらけたる夜の月影に雪かきわけて梅の花折る

と詠みければ、主上深く叡感ましゝ、公任もまた生涯の思出この時にありきといへりとぞ。

傳へていふ、前九年の役安倍宗任捕虜となりて京都に入れるに卿相雲客「奥の夷のさこそ無骨なるらめ、いざ戯れて笑はん。」とて



孤山の梅と林和靖の墓

百磯城の
もゝしきの大宮人は暇あれや梅をかざしてこゝにつどへる
（萬葉集）

わが宿の
わが宿の梅咲きたりと告げやらばこちふに似たり散りぬともよし
（萬葉集）

色こそ
春の夜のやみはあやなし梅の花色こそ見えねかやは隠るゝ
（古今集凡河内躬恒）

人はいさ
人はいさ心も知らず古里は花ぞ昔の香ににほひける
（古今集紀貫之）

藤原公任
平安時代の歌人
學者
四條大納言
長久二年（一〇四一）
薨
年七十六

生田の森
今神戸市の中にある

梶原景季
景時の長子

荻生惣右衛門
徂徠と號す
江戸の儒者
享保十三年（一三八〇）歿
年六十三

一枝の梅を示して、これは何ぞと問ふ。宗任とりあへず。

我が國の梅の花とは見つれども大宮人はなにといふらん

と答へたるに、一座しらけて恥入りぬとなり。源平の亂、生田の森にて梶原景季片岡の梅の盛なるを手折り、箙にさして奮戰せるに、花は風に吹かれて鎧の上に散れるを、敵も味方もやさしき武士の振舞かなと感じけりとかや。

月瀬梅

其角
江戸の俳人
榎本氏
寶永四年（一三六七）歿
年四十七

嵐雪
服部氏
淡路生江戸住
寶永四年（一三六七）歿
年五十四

烈公
德川齊昭
水戸藩主
勤王家
萬延元年（一三六〇）薨
年六十一

齋藤拙堂
伊勢の漢學者
名は正謙
慶應元年（一三六五）歿
年六十九

梅が香や隣は荻生惣右衛門

とは、元祿の頃其角が名聲喧傳せる學者徂徠をその花に喩へて贊したるもの。

梅一輪々々ほどのあたゝかさ

とは嵐雪が窓前の南枝に日々の春を占へるなり。水戸の烈公が梅を種ゑしより偕樂園は今に關東の名園たり、齋藤拙堂が記「勝に寫されしより月瀨は櫻の吉野と並べ稱せらるゝに至りぬ。春寒未だ去らざる時、爐を擁して古人を友とすれば、遠寺の鐘聲霜に冴ゆ。一陣の暗香に驚いて顧れば、見得たり瓶中の芳姿。これ晝間の散策に竹外の一枝を手折りもて來し家づとなりけり。（東圃遺稿）

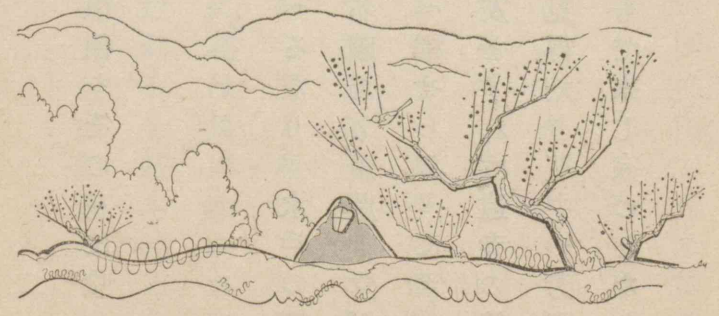
島崎藤村
詩人
小說家
名は春樹
明治五年長野縣
木曾生

二六　春は來ぬ

島崎藤村

春はきぬ、
　春はきぬ。
初音やさしきうぐひすよ、
こぞに別離を告げよかし。
谷間に殘る白雪よ、
葬りかくせ去歲の冬。

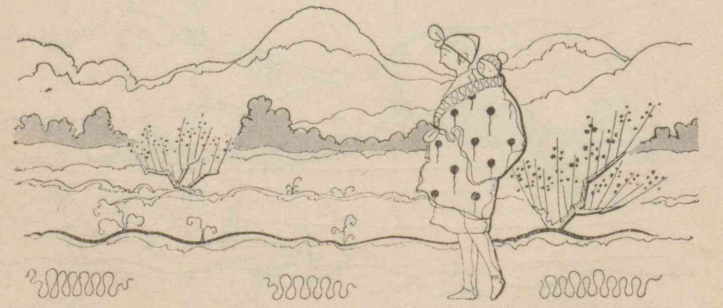
春はきぬ、
　春はきぬ。
さみしく、さむく、ことばなく、
まづしく、くらく、ひかりなく、



みにくく、おもく、ちからなく、
かなしき冬よ、行きねかし。

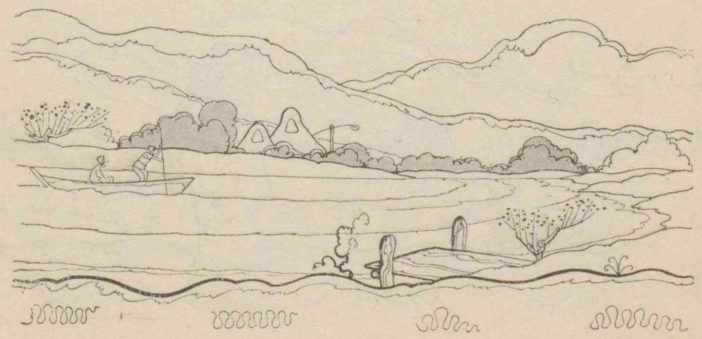
春はきぬ、
　春はきぬ。
淺みどりなる新草よ、
とほき野面を畫けかし。
さきては紅き春花よ、
樹々の梢を染めよかし。

春はきぬ、
　春はきぬ。



霞よ、雲よ、ゆるぎいで、
氷れる空をあたゝめよ。
花の香おくる春風よ、
眠れる山を吹きさませ。

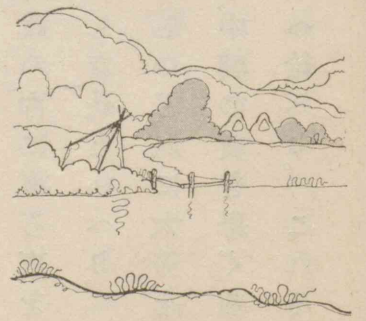
春はきぬ、
春はきぬ。
春をよせくる朝汐よ、
蘆の枯葉を洗ひ去れ。
霞に醉へる雛鶴よ、
若きあしたの空に飛べ。



岩倉右府
右大臣岩倉具視
大勳位
公爵
明治十六年薨
年五十九

井上毅
法制家
文部大臣
子爵
熊本藩士
明治二十八年薨
年五十二

春はきぬ、
春はきぬ。
うれひの芹の根を絶えて、
氷れるなみだ今いづこ。
つもれる雪の消えうせて、
けふの若葉と萌えよかし。（藤村全集――若菜集）



二七　岩倉右府

井上毅

月日の小車は旋り〳〵て流るゝ水よりも早く、故右府公の世を去り給ひしより、今ははや十年餘りぞ過ぎぬる。

大詔のまに〳〵我が國を富士がねの安きに置かでやはと思ひ入り給へる公の一筋の誠心は、天地の間に滿ちわたりて、窮みな

き後の世まで語り繼ぎ聞繼ぐべければ、今更に言ふまでもなきことながら、公の逸事の一二を思ひ出づるまゝに書き記して、世の鑑ともし、史人の料ともなさん。

維新の初めに神武の古に復るといへる大義を定められしは、この公の輔翼の力にぞある。碩學野々口隆正氏の說に、「建武中興の振はざりしは、當時の搢紳にその人なかりしによれり。源親房卿は學識ありて時の帝の御覺えもめでたかりしかど、この人の所見は延喜・天曆の跡に復るにありて、神武の古に復る事を知らず。さてこそ公家・武家の間に隙を生ぜしなれ。」といへり。

故右府公は搢紳有職の家に生ひ立ち給ひしかど、夙に大勢を達觀して王政に公武の別なきことを看破し、中興の實を擧ぐるために、神武の古に復るといへる一大義を唱へ給へり。これぞ明

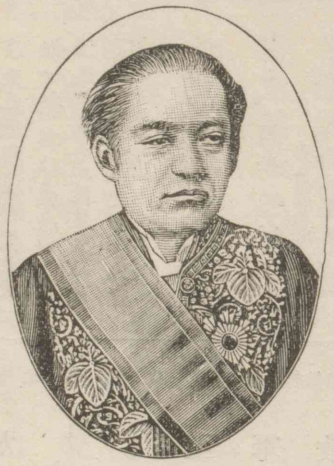
野々口隆正
國學者
石見國津和野藩士
明治五年卒
年八十

源親房
吉野朝の忠臣
神皇正統記の著者
正平九年（一三〇一―一四）
薨

延喜
醍醐天皇の御世
（一九五―一九八三）

天曆
村上天皇の御世
（一九〇七―一九六六）

治の朝廷に人ありと申すべき。この一大義は百揆庶政の原動力となりて、藤原氏以來千有餘年間の盤根錯節をば總べて破竹の勢を以て破りたり。世の人は、明治の中興は五百年來の武門の政を破りたるなりと思ふらめど、心ある人は溯りて天平以來の宿弊の更に破り難きを破られたることを知るならん。」



岩倉具視

徳川氏の大政を返上せし際には、公は譴を蒙りて久しき間岩倉村に蟄居し、天日をも見給はざりしが、俄かに召によりて夜中參內し給ひけり。この折、公は一の大囊を携へて宮門に入り給ひしが、囊中の文書は皆公が蟄居中に計畫せられて、玉松操といい

大政返上
慶應三年（一八六七）十月十四日

岩倉村に蟄居し
文久二年（一八六二）京都府九月公は山城國愛宕郡岩倉村に蟄居された

岩倉村は京都の北十六粁の山里

玉松操
京都の人
勤王家
明治五年歿
年六十三

大令

慶應三年(一八六七)十二月王政復古の大令が下つた

筆蹟

詔。體二太乙一而登レ位、膺二景命一以改レ元。洵聖代之典型、而萬世之標準也。朕雖二否德一、幸賴二祖宗之靈一、祇承二鴻緒一、躬親二萬機之政一、乃改レ元欲下與二海內億兆一更始一新上。其改二慶應四年一爲二明治元年一。自レ今以後革二舊制一、一世一元以爲二永式一。主者施行。

明治元年九月八日

議政官

輔相

岩倉右兵衞督

議定

中山儀同

正親町三條前大納言

德大寺大納言

中御門大納言

松平中納言

山內中納言

宇和島宰相

詔體太乙而登位膺景命以改元洵聖代之典型而萬世之標準也

朕雖否德幸賴祖宗之靈祇承鴻緒躬親萬機之政乃改元欲與海內億兆更始一新其改慶應四年爲明治元年自今以後革易舊制一世一元以爲永式主者施行

慶應四年九月八日(明治元年)

議政官

輔相

岩倉右兵衞督

議定

中山儀同

正親町三條前大納言

德大寺大納言

中御門大納言

越前中納言

山內中納言

宇和島宰相

改元の詔草案(玉松操筆蹟)

ふ人に起草せしめられつる復古經綸の策案なりき。

この時大勢尙定まらずして物論紛々たりしに、公は俄かに躬を以て責に當り、從容として應答せしかば、雄藩の主も爲に容を改め、朝議大いに決するに至る。而して大令一度發して、外は將軍を廢し、內は攝關議奏・傳奏を廢し、親政の洪圖を旬日の內に定め、後世動かすべからざる基礎を立てられたるは、實に公の輔翼の力なり。就中復古の第三日に、禁闈に達文を揭げられて女

房の請謁を納るゝことを痛く禁止せられたるは、「これぞ數年の宿弊を除き、將來の爲に一大美事を遺したるなる。」と、公の晩年に親しく物語し給ひき。

玉松操は一の偉丈夫なりき。平生聲色を近づけず、酒肉を嗜まず、書を讀むを樂しみとなし、夙に神武復古の說を抱きぬ。偶〻公に知られて蟄居の一室を貸し與へられ、起居を俱にして畫策する所あり。公は玉松の功を推して、「己の初年の事業は皆彼の力なり。」とまでのたまへり。薨去の前年に、一夕ことさらに余を召して玉松の履歷を物語し給ひ、「その人の功績を空しくなせそ。書き記して後の世の語り繼ぎの料とせよ。」と慇懃に仰せられけり。此の夜、余は他の二人を誘ひて俱に侍りしが、その中の一人は漏れなく公の物語を筆に留めたり。己の功を推して人に讓

り給ふこと、いとめでたし。

その後、公の朝廷に勸めまゐらせて、斷然と開國の國是を執らるるに及びて、玉松は「姦雄に誤られたり。」との一語を言ひ放ちて公の許を辭し、召されても應へだにせず、一室に屛風をたて籠め、その中にて讀書に日を送りけるが、「功を論じ賞を頒つ日に逢はずして世を去りぬるぞ歎かはしき。」と公のたまひし。

公は蟄居していましながら、その家の裏の隱戸より、人知れず大久保・木戸・小松・廣澤等の諸名士を引きて內外の大勢を談論せられ、此の時已に鎖國の非なることを悟らせられつるに、玉松は露ほどもこの事を知らざりけり。彼が口惜しく思ひつるも理なりき。

維新後の公が翼贊の功は、明治の大御史と共に後の世に傳ふべ

諸名士
大久保利通
木戸孝允
小松淸廉
廣澤眞臣

きなれば、こゝに書きつゞくる要なけれど、公は己の勞を露ほども誇りがほに人に語り合ふことなかりしほどに、史人もえ知らぬことぞ多かめる。世の人は、明治二十年と二十二年との條約改正中止の件をば、何某の盡力にて、となりし、かくなりしなど、事事しく言ひはやせど、この事のおこりは十五年にて、公はあかず思し召すことありて一方ならず心を盡くし給ひ、そのをり一たび中止となれり。されども公は深く祕め給ひて、文書一箱ほどもあるを家に藏めて出されざりしかば、內々の人ならではえ知る者なかりき。此等は後の人の鑑にこそ。

剛膽は政事家の第一要德なりとぞ聞ゆる。公は長袖の人とも覺えぬばかりに剛毅の德を備へおはしけり。征韓の議、今にも蕭牆の內に變亂を見んとする時に、陸軍將校の中にて武勇の聞

えある一人は公の邸に參り、客室に謁見し、一應二應議論の末、怒れる眼、血をそゝぎ、毛髮倒に竪ち、脇差を左の手にて鞘も撓むばかりに握りつめ、「若し御意見を枉げたまはずば、御身のために惡しかりなん。」と言放ちつゝ、膝と膝との間一尺ばかりにまでつめかけたり。此の時、公の家の侍ども次の間に控へ居て障子の隙より窺ひつゝ、あはやと手に汗を握りたりしに、公は少しも動ずる色なく、自若としてその座を守り給ひきとぞ、內の人の物語りし。

公の畏きあたりの御覺え殊にめでたかりしは世の人の知る所なるが、「大君の御爲とならば、我をおきて人はあらじ。」と思ひ給へる隱さはぬ明き心の深かりしは、これぞ君臣水魚とも申し奉るべきか。雲の上の事は筆に載するも畏ければ漏らしぬ。

君臣水魚

先主遂訪レ亮。凡三往乃見。因屏レ人與計レ事、善レ之。於レ是情好日密。關羽張飛等不レ悅。先主曰、孤之有二孔明一猶二魚之有レ水。願勿二復言一。（蜀志）

公は大久保故內務卿と心交特に深くおはしき。岩倉村蟄居の折より、大久保卿は密々の往復しきりなりしが、「公の身の上心もとなし。」とて、夜な〳〵年少き侍を遣はして守衛せさせつることありしを、公は知り給はざりき。西南の亂平ぎし後、兩公の間に契り給ふ事ありしが、日ならざるに大久保卿の遭難とはなりぬ。一日、公の物語に、「世の人大久保の志を知りたらんには、いかばかりか哀しみ思ふらん。維新のはじめ十年間は創業撥亂の時なりき。これより後十年こそは內治を整理し民利を進むる時なれとて、將來のために大いに計畫する所ありしに、料らずもかたみの言葉とはなりぬ。」とのたまへり。

大久保利通

大久保卿の遭難

明治十一年五月參內の途次石川縣人島田一郎等に赤坂紀尾井町で刺されて薨じた

公は夙に開國の國是を唱へ給ひつゝ、又厚く國體の基礎を重んじ給ひき。晩年公の奏上によりて宮內省に帝室制度取調局を設けられしは、祖宗遺訓の貴きことを世に知らせん爲の計らひとぞ聞えし。

公は勤儉の二字を大政の本として輔弼に心を盡くし給ひき。又家を治むるにも儉約を旨とせられ、台鼎の高き位に上り給ひし後も、「岩倉村の蟄居の時をな忘れそ。」とて常に公達を戒め給ひけり。薨去の前、家範を作り、「後の世まで守り文にせよ。」とて子孫に遺し給ひしが、その附錄一篇は專ら奢侈と遊惰とを戒め給ひ、重き病の床にいましつゝ、親しく旨を授けて侍ふ人に筆執らせ給ひし條にぞある。一門の人々が案文に調印せしは七月十五日にして、薨去の前五日なりけり。今はの際に遺言ありて、己の

台鼎
在レ人三公。
在レ天三台。（漢書）
鼎三公象。（尙書註）
太政大臣左右大臣の三公

墓石は父君の墓石の寸法に準へよ。」とありきとなん。

公は日に夜に公の事にのみ心を碎きて、寸時も餘りの暇あらせ給はざりき。朝四時前には目を覺し「侍やある。」と聲かけさせ給ひ「今日は何某をば何時に召せ。次に、何某をば何時に呼べ。又明日は何某に何時に來れ、何某に夕何時に參れと記して申遣はせ。」など仰せられき。多くの公達は父君の代筆として、文かくことに忙しかりきとなん。

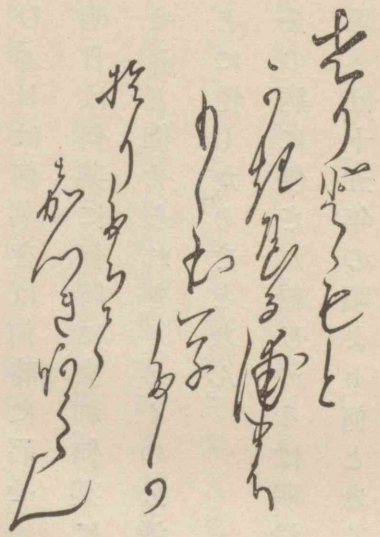
公の病に侵され給ひつるは明治十六年の春なりしかど、後より思へば、十五年の頃より、何となくあらざらん後の世の心づくしの節々を知る人に語らせ給ひしことぞ多かりける。同年の冬或人のもとに贈り給へる書の末に、

さりともとかきやる浦の藻鹽草たがおりたちてかづき

或人
本文の作者子爵井上毅

あぐらん

とぞありし。先だつも後るゝも世の習とはいひながら、御國のために行末を思ひやられし公の心こそ、いとあはれなれ。



岩倉具視筆蹟（井上子爵藏）

筆蹟
さりともとかき
やる浦のもしほ
草たがおりたち
てかづきあぐら
ん

公の平生の仰に「大臣たるものはその進退によりて節操を二つにすべきにあらず。維新の功臣、晩節を全くせざるもの多きぞ口惜しきことの極みなる。われこそ躬を以て人臣の標準は示さめ。」とのたまひしが、病重らせ給ひし後、辭表を捧げん事を思ひ立ち給ひ、同僚の諸卿が支へ止めまゐらせしも聽き入れず、是非にとて歎き請ひ給ひしかば、上には忝くも

誠ある意ばへを酌ませ給ひ、聞屆けさせ、厚き惠の御勅をさへ下し賜ひけり。かくと承りて、公はさしもに重き衾を押退け、涙に咽び、天恩の忝きを拜謝しつゝ、いそぎ家の子らを召しつどへられ、「今日こそは病の輕きを覺えたれ。それ盃まゐれ。」とて酒を賜ひけり。人々よろこびの色をなしたりけるが、さてその翌日に事重らせたまひぬるぞかひなき。今はのきはまで、夢幻の間にも、おほやけの事のみ心に懸けさせたまひ、なからん後の事までも人もて雲の上に聞え上げまゐらせしこともありきとなん。

余は本末の序もなく思ひ出づるまゝに書き續けぬ。あはれ、この文讀まん人々よ、なき人のかきやりつる藻鹽草を、いやつぎつぎにかづきあぐべき丈夫の伴となりて、公の地下の靈を百載の後にまで慰めよかし。（梧陰存稿）

嘉納治五郎
教育家
號は甲南
東京高等師範學校名譽教授
講道館師範
貴族院議員
萬延元年(一八六〇)
兵庫縣西灘生

二八　膽力

嘉納治五郎

大丈夫と生まれたからには、死生の境に出入して、從容自若として事に當り、天下の大事を談笑の間に決するだけの膽力を有したいものである。膽力のあるものは、白刃眼前に閃き來り、危巖頭上に崩れかゝるとも、悠然として身を持することが出來る。膽力のないものは、天井から鼠の糞が一つ落ちて來ても、膽を冷し色を失ふやうなことになるのである。

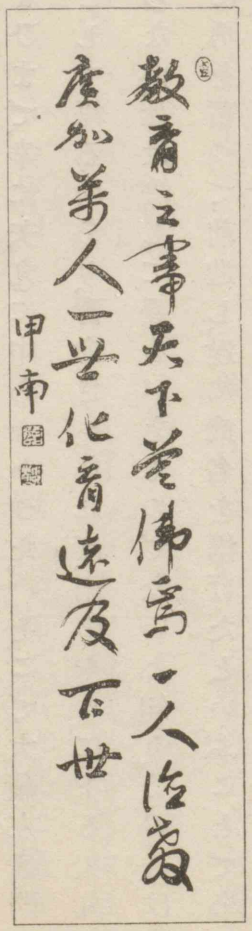
膽力は天稟にこれを有して居るものも少からぬのであるが、又決して修養し得られぬものではない。上杉謙信が十四五歲の時、大敵に追はれて門番所の板敷の下に潛伏しながら安眠して居つた事や、徳川光圀が六歲の時、暗夜に刑場に行つて死人の首

を持歸つた事や、ネルソンが幼時から恐怖の何ものたるを知らなかつた事などは、皆天稟と見るべきものであるが、修養によつて剛膽の人となつた例も亦決して稀ではない。

昔武田信玄の部下に岩間大藏左衞門といふ武士があつた。その容貌は魁偉で、一見したところ儼然たる大丈夫であつたが、その性質は至つて卑怯であつた。信玄が之を實戰にためしてみたのに、七たび進んで七たび退いた。信玄は「これではとても普通の方法で教誨激勵することは出來ない。」と思つて、或日又戰爭

筆蹟

教育之事天下莫レ偉レ焉。一人德教廣加二萬人一一世化育遠及二百世一。　甲南



嘉納治五郎筆蹟

の始つた時、大藏左衞門を掩護物のない處に縛りつけ、敵に向つて坐らせて、一歩も身動きの出來ないやうにした。矢丸は雨のやうに飛んで來る。銃聲は雷の如くに轟く。大藏左衞門は恐怖して殆ど死人のやうになつてしまつた。併しその戰爭のしまひまで、幸に矢丸に中らなかつた。そこで大藏左衞門は飜然として悟る所あり、壽命さへあれば、雨のやうに下る矢丸でも中らない、死は決して畏るべきものでないと知り、その後は戰爭毎に勇を奮つて前進し、遂に武名を揚げたといふことである。之を見ても、諦めるといふ心の持方の膽力養成に必要である事がわかる。危險・災害等の場合に於て、成るべく安全に之を避けようとするのは自然の人情に相違ないが、しかし、さういふ心の爲に却て怯懦に陷る事があるのである。その最も惡い結果を

身に引受けても是非に及ばぬといふ覺悟を極めれば、膽は自然にすわるのである。例へば眞劍勝負をするといふ場合に、敵双を逃れようと命を惜んではならない。まづ身を捨てる覺悟をきはめ、「吾が骨を切らせて敵の命を奪へ。」といふやうに死に身になつて、その上に吾が手段と伎倆とを盡くす方が、命を惜むよりは自由がきくから、自然と數倍の働をする事が出來る。強ひて危害を避けようとすると、煩悶し、疑惧し、狼狽して、自械自縛するので、十分の伎倆も六七分しか働かず、却て不結果に陷るのである。諦めるといふ心の持方の練習のある者は、危害が身に迫つたときにも、「此の際に狼狽したところで仕方が無い、只今執るべき方法は唯一つのみ。」と諦め、その方法に全力を盡くして、さて敗れたならばそれまでの事と覺悟を極めてかゝるから、別に惶惑

雲居　高僧　土佐國幡多郡の生
瑞巖寺　宮城縣松島町にある禪寺
松島灣に臨む伊達家の廟所
雄島　瑞巖寺の西南で陸に近い島

するやうなことはない。

落膽喪神は、或場合にはその危險の結果を豫想した後ではなくして、衝動的に直接の瞬間に起つて來ることがある。これは動物の本能の一つで、殆ど制止し難き勢を以て發動するものであるが、かゝる場合に何か良い工夫はないであらうか。雲居和尚といふのは、伊達政宗に招かれて松島の瑞巖寺に住んで居つた名僧であるが、毎夜雄島の石窟に赴いて坐禪をして居つた。或時一少年がその悟道の程をためさうと思つて、路傍の松の上に隱れ、雲居が下に來た所を、手を伸して頭をぐつと攫んだ。雲居は立止つたまゝで動かなかつたので、少年は手を放した。數日の後、その少年は雲居に向ひ、「近頃寂しい處で怪物に出會つたことはなかつたか。」と問うたら、雲居は答へて、「いや、別に何も見たこ

とはない。五六日前、闇の中で自分の頭を攫んだものがあつたが、その手に暖みがあつたから、子供らの惡戯だと思つた。」といつたさうである。この雲居の沈勇は如何にして養はれたものであるか、定めて心膽を練つた結果であらう。

しかし、かゝる場合に處すべき簡單なる一法として、こゝに少年者に告ぐべき事がある。それは他でもない、下腹に力を入れることである。これは氣を落ちつける一法として、古來經驗の上から有效と認められて居るものである。世に、理窟の上からは妖怪のないことを信じてゐながら、暗夜墓地を通過して、石塔の陰から突然犬の飛出すのに、思はず膽を冷すやうなものがある。かういふ時に下腹に力を入れると、今飛出したのは犬であるか、猫であるか、或は他の者であるか、判斷がつき易くなるのである。

衝動的に起る恐怖心を去るのも、畢竟鍛錬の功に俟つ外はないのであるが、吾人は年少の人に、まづその手始の一法として此の事を勸めるのである。さうして終には、種々の工夫を凝らして、天地の顚倒するやうな大變にも、泰然自若として我を失はない樣な剛膽な人とならんことを望むのである。（青年修養訓）

師範國文 第一部用 卷二終

大正十四年十月二十七日印刷
大正十四年十月三十日發行
大正十五年三月十三日訂正再版發行
昭和五年八月二十八日訂正三版印刷
昭和五年八月三十一日訂正三版發行
昭和六年一月二十五日訂正四版印刷
昭和六年一月二十八日訂正四版發行

定價	昭和六年度臨時定價
卷一 金四五錢	金七十一錢
卷二 金四十四錢	金七十錢
卷三 金四十一錢	金六十五錢
卷四、五、六、七、八 金四十錢	金六十三錢
卷九、十 金三十二錢	金五十一錢

編者 吉田彌平
發行者 東京市神田區通神保町六番地 上原才一郎
印刷者 東京市神田區通神保町六番地 山崎與吉
發行所 東京市神田區通神保町六番地 光風館書店 （電話神田三〇八七番）（振替口座東京三二七番）

著作權所有

本館發行の教科書は常に多數の製本準備有之候につき萬一各地賣捌所に賣切等にて課業に御差支の節は直接御註文被下候はゞ直に御送附可致候

東京秀英舍印刷

廣島縣廣島師範學校

第一學年

加藤道曉

広島大学図書
2000301925